

車夫を返して晝食の膳に向ふと、熱い炊きたての飯に困つて了つたが、發車の時刻が近づくので、急しく宿を立つた。地藏前の土塀に沿ふて廣い道を進むと、雨に霞んだ野も山も、淡い茶褐色にかすれて、藁焼く烟が蒼く低く、畑の上を這つてゐる、停車場に着いて十分許り待つと、奈良行の汽車が來た。六十位の老人と、十六七の赤いリボンの令嬢とが、樂し相に話す隣に坐を占めて、窓から外を眺むれば、關の宿は雨に閉され、雲が山から下つて來て、森を隠して了ふと、其れが又畑の様に傳つて、地藏堂の大きな屋根の上に懸る。汽車が進むに従つて、今迄の寒さは忘れた様に、スチームの温氣に睡くなつて、四邊に迫る山々の景色を、うつら／＼と眺めて行けば加太から柘植を過ぎて、山は愈々深く、峯に積つた白雪が、次第／＼に多くなる。深い溪底の森から、ほの／＼と立つ蒼い烟、危く架る丸木橋を、木杣がとぼ／＼渡つてゐた。木津から乗替えて、京の七條に着いたのは、夜の七時に近く、雨に濡れた電車道の燈火は、流燈の如く水を照らして、臙ながらの東山、鴨川

の瀬枕音高く響いて、寒い／＼山風が暗い大空を吹いて行く。

七

欄干に積る淡雪が曉の雨に凍つて、水氣に閉ぢた東山、枯れ柳に靡く靄は靡々々、八坂清水の塔の頂ばかり、松の木間から現はれてゐる。身を切る寒さに堪え兼ねて、火鉢を圍んで雑談に耽つてゐると、表に派手な聲がして、俥が止る。聽て上つて來たのは、昨年遇つた住岩の仲居で、後から十三位の華奢な舞妓が二人、松上の鶴の花櫛に、銀のひら／＼の簪、藤色に梅模様の振袖に金茶の帯をだらりとして、肅しう坐つたのは丸奴で、同じ花櫛を挿して、小豆色に竹の模様振袖、黒地に丹で松を出した帯を締めたのは小春である。障子を閉めた中に坐つて、後ろに大鼓を入れた小葛籠と、小鼓の這入つた緋の袋を置いて、白い襖を背景にした丸奴は、手を膝に重ねて外を眺めた。



「あのなア」と急に中澤子を顧つた。「お伯父さん直ぐお描きやすかに  
「未だ遊んでても好いよ」と箱を出して、繪具を檢べてゐる

「あんたもお描きやすのか」と自分の方に向いて繪具を見る。

雨は霧の様に烟つた三十六峯、巖を通る雨傘の、黄色や濫蛇の目が、ごんぐり橋に懸ると、風に袖が簸つて、ひらく／＼する、水嵩増した鴨川の河原を、  
箆を着た男が、膝まで這入つて、網を打ち／＼上つて行く。

自分は十號のカンバスに向つて、描き始めると、丸奴は最う濟した顔で坐つてゐた。宿の仲居がおかきを持つて上つて来て、火鉢の傍に置くと、いつか丸奴の小さい手が動いて、皿を曳く

「何しやすの、えらい意地の奇麗なお子ごすな。」

「お手ごすえ、妾じやあらへん、とおかきを掴む」

「まア賢いな、うまい事言ふてやはる、」と仲居は笑つてゐる。  
十五分も過つと最う倦きて了つて、手拍子で中音に謠ひ出す。

「如何も困るな」と、誰か筆を動かしながら獨語いた  
「最う柔順しうしますえ、斯うごすか、」と手を重ねてゐる。

折しも仲居が晝食の膳を運んで来て、すき焼きの用意を初める。強く炭火の匂ひがして部屋の中は、春先の様に暖かだ。

「へいごうぞ、御加減御見やお呉れやす、」と仲居が言ふ

「へいおほきに」と丸奴は濟した顔で言ふのが、如何にも可笑しいので、皆笑ひ出した。折から又格子の音がして、上つて来たのは、桃太郎と云ふ二十五六の藝妓だ。

晝を中止して晝食に懸ると、雨が晴れかゝつた河原の向ふは、四條五條の樓々に柳が靡いて、雲から抜けた比叡山、禿げた山に横日が赫と射して、長い橋を渡る人影が、次第に繁くなつて来る。

京に泊つた雨の三日は夢の様に過ぎて、寝ながらに見る東山の淡雪に、眞晝の月の白く射すのを後にして旅から旅へと漂浪する一隊は、花まだ咲かぬ東



海道を、東へくと迎るのである。

熊公日記

初日

寒い晩に旅立をするのはなんだか心細かった。瀛車の内は一べいの人だ。三人隅の方に陣取る。外は身を切られる様な寒さだが箱の内は馬鹿に温け。エ世の中は贅澤になつたもんだ。

二日

人は多いが氣の勢か何もなく淋しい。濱松あたりで夜が明けた。少し北山と御出なすつた。御兩人はイヤに我慢をして居るが仕方がねーから一人で御免蒙つて、パイ一きめに食堂車で云う奴に行く。矢張り馴染の屋臺の方がむまいと思つた。晝頃に名古屋に着いた。山田屋と云ふ家に御神輿を据へて、熱田神社に御参りに行く。晩には二三人の仲間が遊びに来た。

三日

静ちやんの案内で見物に出かけるんだが雪が降つて居るので閉口した。大奮發でござら、オット丹前と云わなきや通でねー、こいつ二枚着て、傘をさした様は、あんまりいゝ圖ぢやねーや。

晩にはお飯を御馳走になりに行く。名古屋には美人系て云うものがあるんだささ。

四日

東京から爲替がやつと届いた。少し遅いが伊勢の方に出かけ、桑名を一寸見物する。

なんともなく古風で氣に入いちやつた。永く居たら面白相な所さ。此所に泊りたかつたが、我慢して四日市に泊る。

五日

今日はいきなり鳥羽に行く事にした。晝を險約で饅頭で辛棒した人があつた。時には旅はつらいさつくつく思つた。

鳥羽港と云うと大層いゝ景色の様だが、己達ア一向感服出来ねー、あんな箱



六

庭は根岸の安公はいくらでも作せえてくれらア。何、眞珠が出来るッて、ペラホーめ、眞珠が出来たッて己達は何の用があるけ。二見の二見館に落着く景色よりは此家がペラホーに御氣に召した、第一親切で氣が利いてらア、何浴衣をもらつたからだ、黙てるい。

日

太神宮様は難有く、神々しくつて頭が上らなかつた。

外宮様から内宮様に、自動車云う奴に乗つて大威張りだ、(内所だが、こいつに乗つたのは皆始めてなんだよ。)

此晩は昔を偲ぶ云う洒落で、油屋に泊る。馬鹿にしやがるのは、伊勢音頭云う奴さ、何の事たアね、大水喰つた伏見人形云う様で、不思議な音聲で、出て來られた時にや身震いが出た、御蔭で此晩はまんじりもしれへ、馬鹿々々しい。

七

日

イヤ今日はこてつもね、忙しい思ひをした、やつこさ流車に乗つたと思へば、松坂で下ろされ直ぐ乗つて阿漕で下ろされ、津で乗つて龜山に下ろさ

八

日

れ、さうく此所で日が暮れて、眞黒闇を關へすたこらく。阿漕の浦なんて、どんな所かと思つたら、イヤハヤ只の海だ、芭蕉云う伯父さんの變な都々逸見てへなものが石に彫付てあつたつけ。津つて云う所は、成程昔ア伊勢は津でもつこ云つたのは尤だ。

皆鈴鹿に出かけた、己ア御免蒙つて、玩具をさがして歩いた、此所から別れて一人で歸る筈だったが、流車におくれて、ごうせ待つなら京都迄行けさ、引張られて、又京都で乗遅れちやつた。ごうも思ひやりの無え友達ごもだ。

さうく京都に泊る事になつた。泊つて見るこやつぱり京都は乙だと思つた。

九

日

起きて見るこ河の中へ電車を通る様になつて、四條の橋が西洋の橋になるつて云う始末だ。あきれけえつた馬鹿共だ、此あんべいだこ、こいつらア今に金閣寺をペンキで塗つて、都踊でダンスを見せやがる、腹が立つから己アも、晩の流車で左様なら。



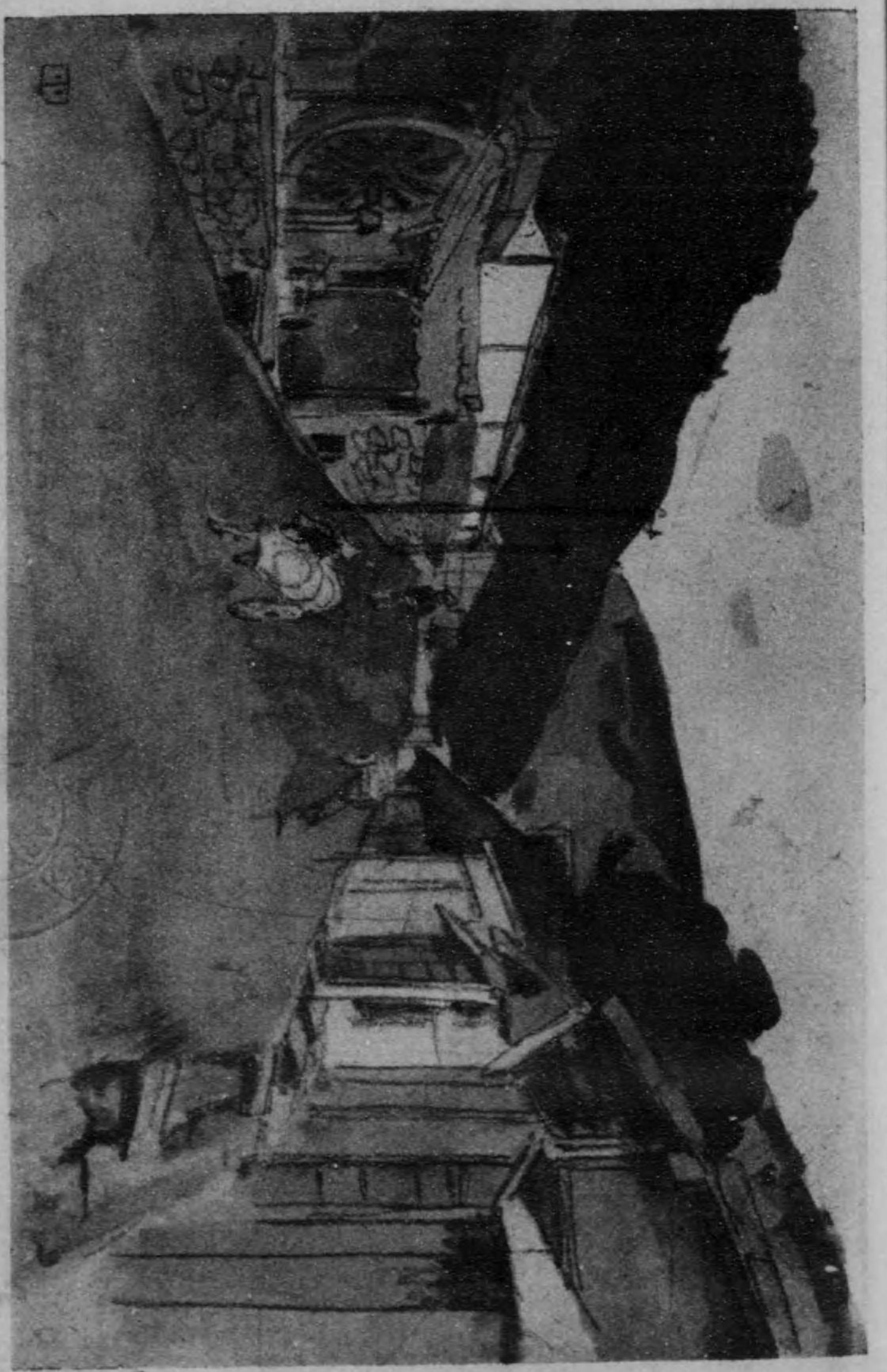
琵琶湖



閑



天津小鐘道

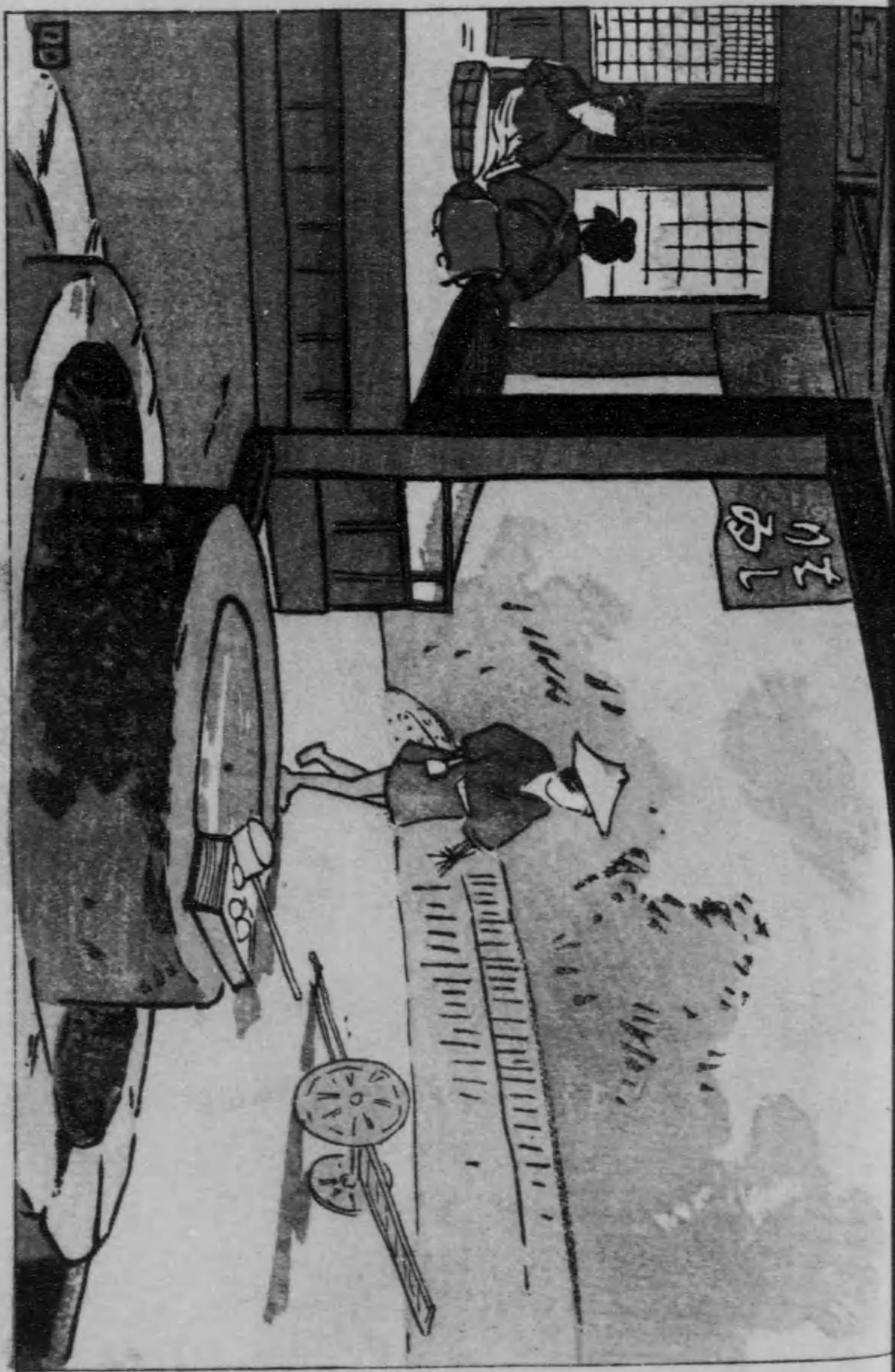


大津小鐘道吉

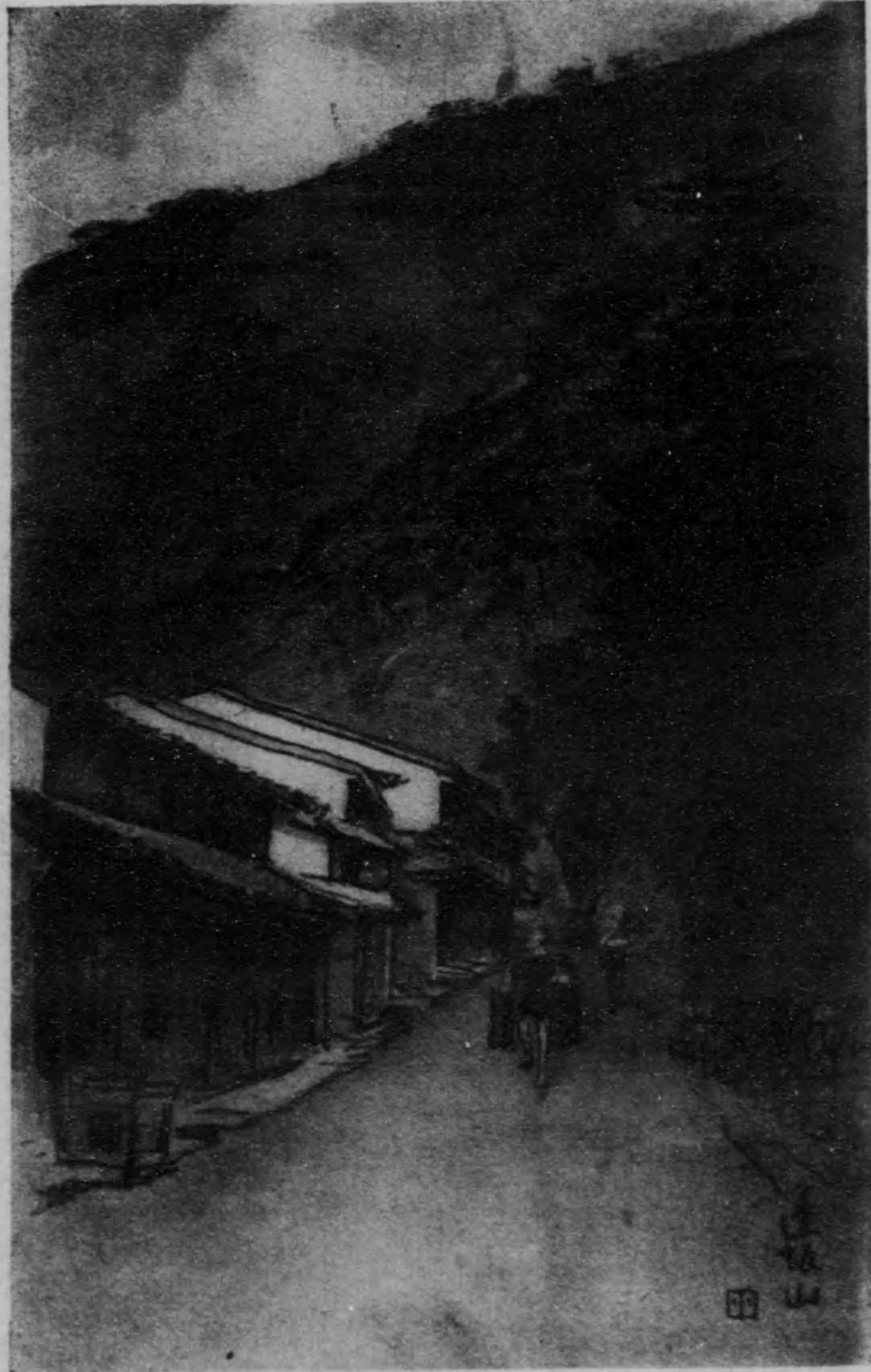












逢坂山  
小鐘林吉



欠



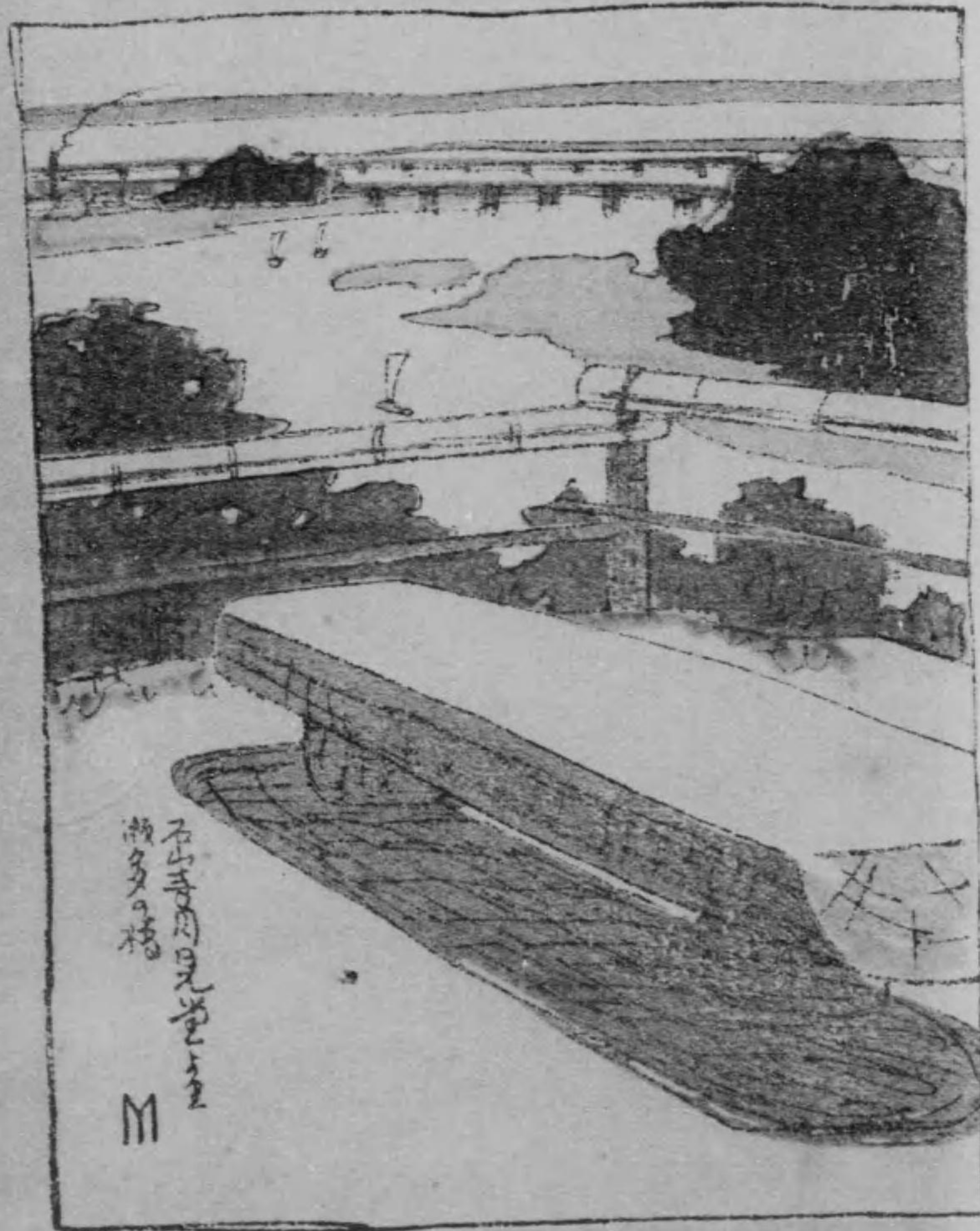


欠

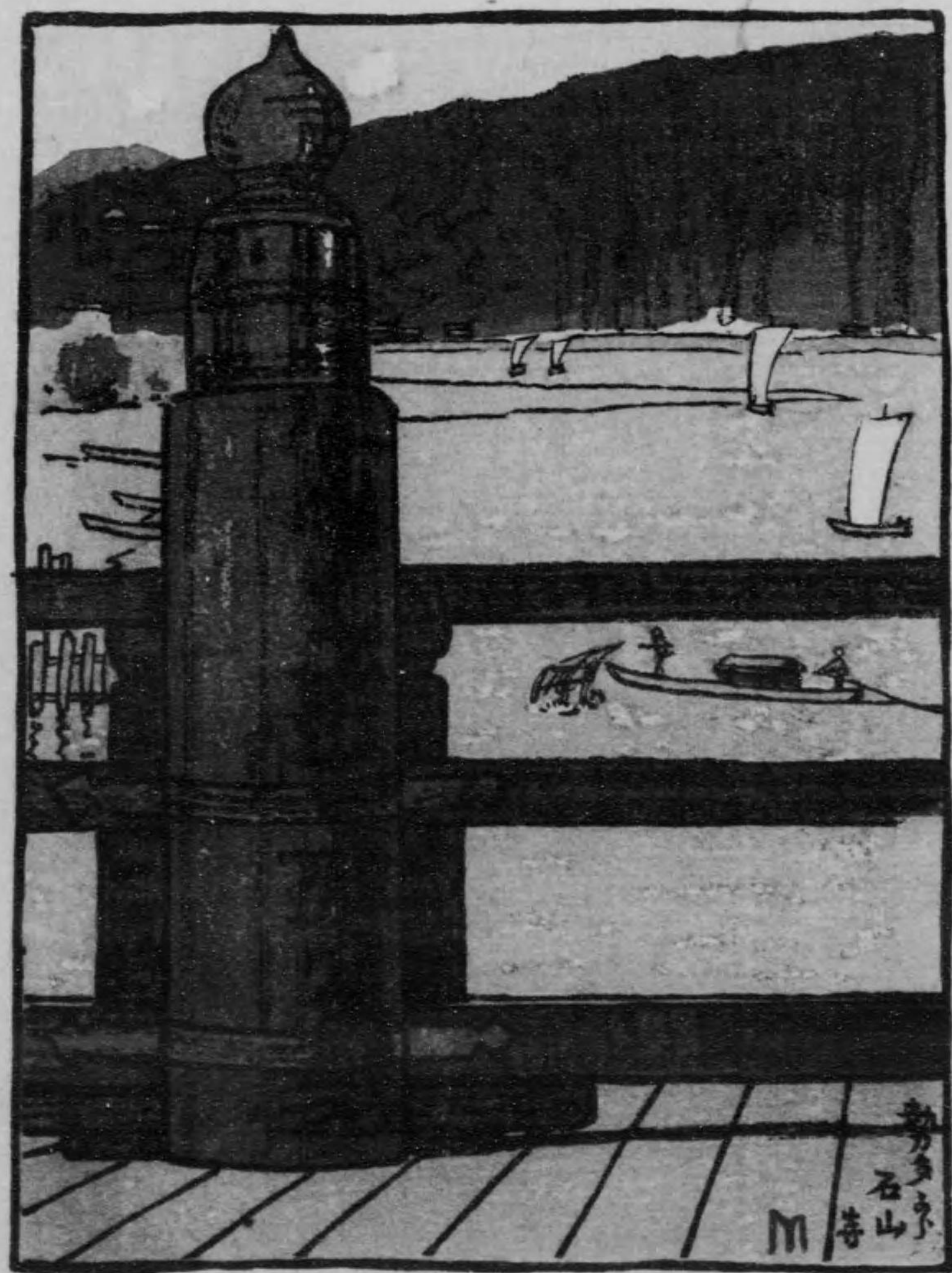






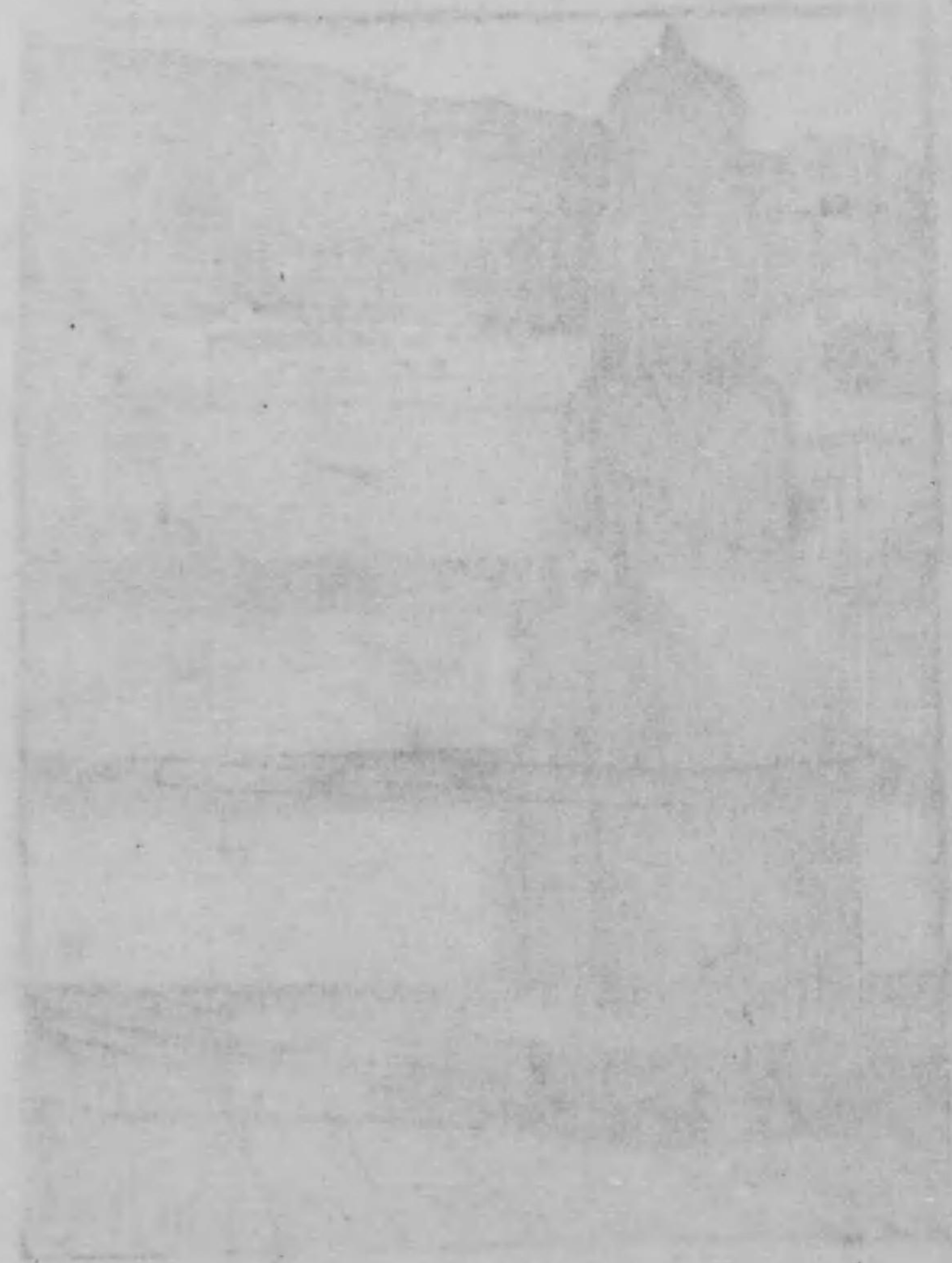






勢多  
石山  
寺  
M







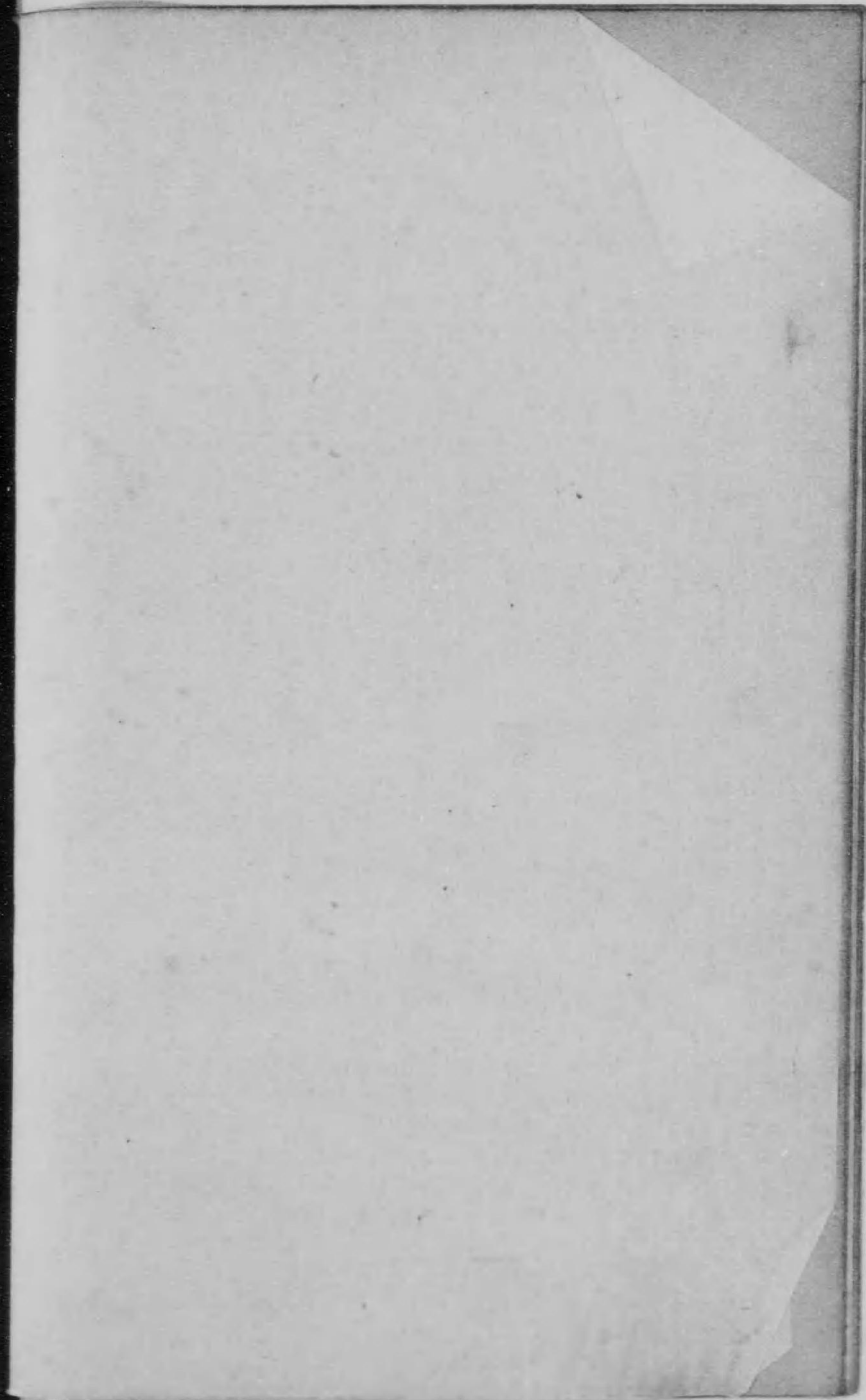
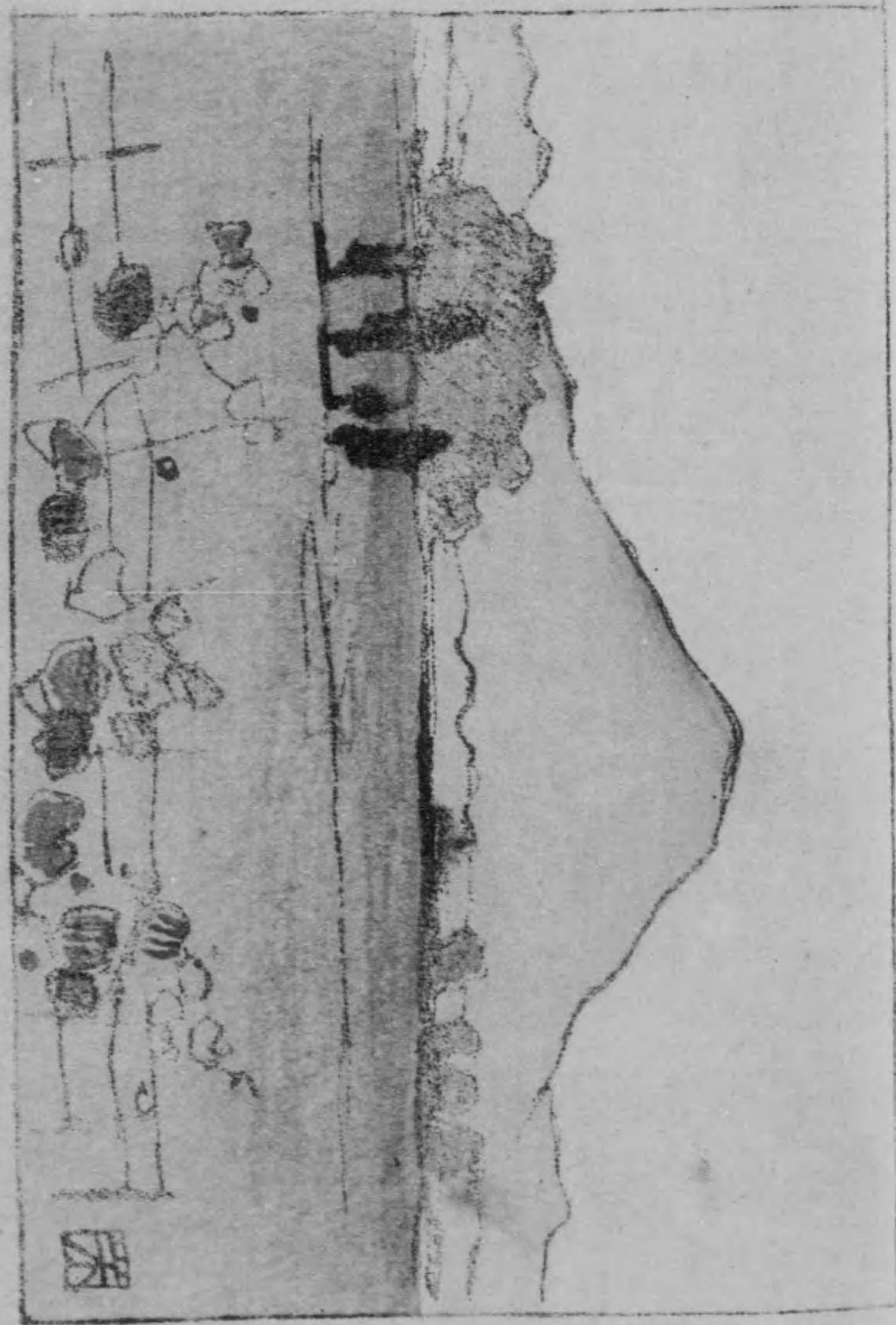
欠



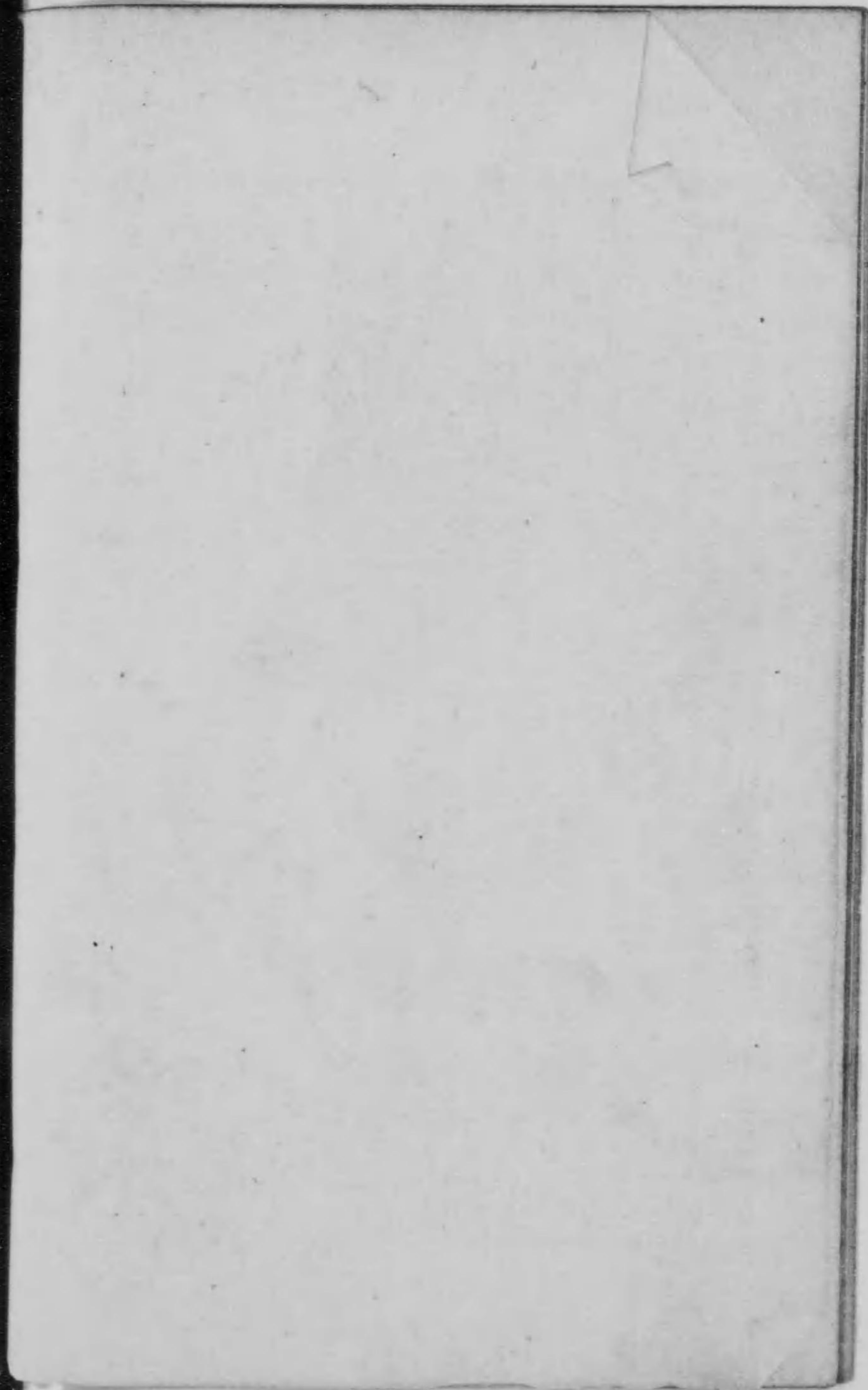


欠

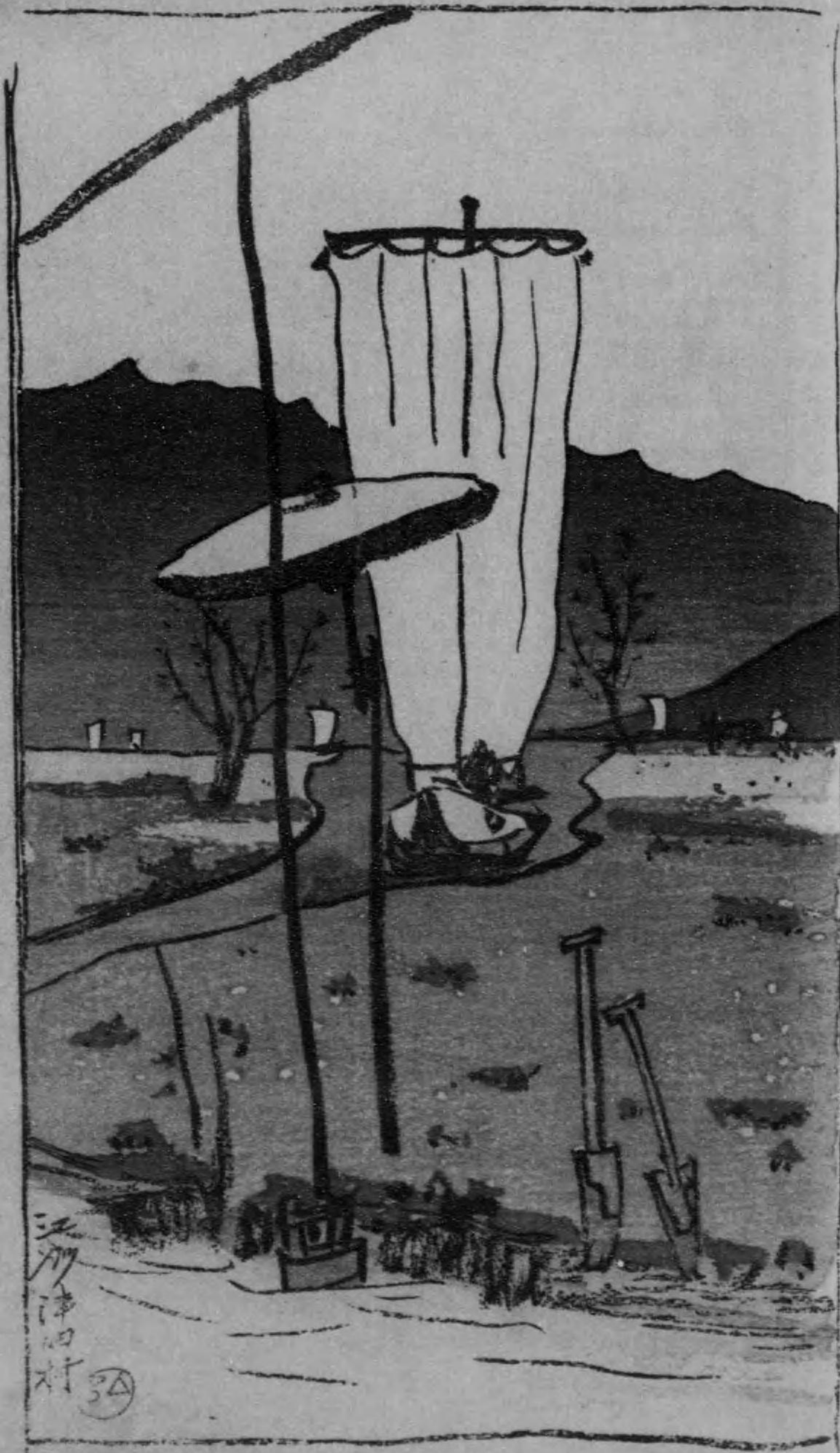












三  
河  
津  
村  
30

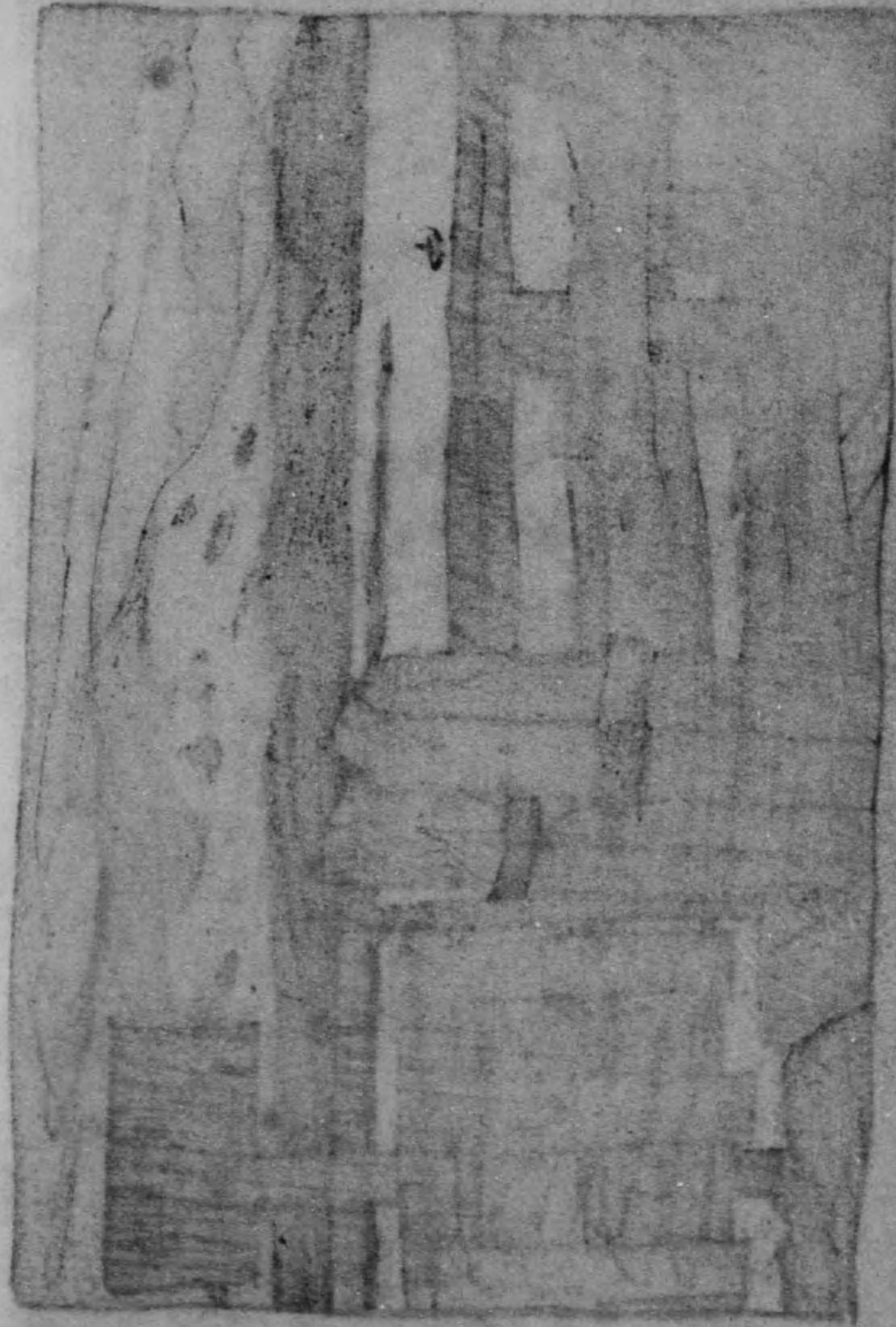






琵琶湖

鴨の河水さら／＼と柳烟つて、緑を包んだ夏霞、蒼い空、蒼い水、悠々たる  
 雲に接した比叡山は、満都の瓦から立つ陽炎に霞んで、寒氷かんこほりの旗が風も無く  
 だらりと垂れてゐる。熱く焔けた大地の砂塵に撒水の痕も無く、人影さへも  
 少ない三條の大橋、欄干の擬寶珠に手を觸れると、火よりも熱く炎やけてゐる。  
 橋を渡つて広い通りを真直に、栗田口に出た一行は、山本子と京都の丹羽黙  
 仙子と自分で、日光は丁度真上から照らして、青蓮院の宮の白い鍊塀に、陰  
 影が紫に落ちて、楠の青葉若葉は翁鶴と、下陰暗く繁つてゐる。日影を避け  
 た荷車の長い轆が、石垣の下に幾つと無く並んで、牛が熱つ相に憩でゐる。





山科街道に出ると、塵に汚れた町の屋根低く、だら／＼上りの坂を登つて來ると、最う背から胸から汗が流れる様で、一町行つては休み、二町行つては立止るので、日の岡峠に懸つた時は午前十時に近かつた。

山々迫つた青葉の蔭が重なつて、岩間を漏れる苔清水の傍に、氷の旗が動いてゐる。楓の樹の下に床几を据へて、十三位の女の子が、見世番をしてゐるので、すか／＼と這入つて行つて、清水が漏れてゐる岩角に、腰を下した。

「サイダーが有るか」と自分が訊く

「はア」と答えて清水の傍に行つた。

青葉の蔭は水に映つて、谷から吹き上る風が冷々ど、流る、汗の上を吹く。

清水に冷したサイダーを、濡れた儘三本、盆に乗せて來たので、息も吐かず飲み始めると冷え切つてゐるので、胸が痛い程冷たいのだ。七月初めの日光は苛々する程照りつけて、日向に對ふとむつと熱さに噎る許り、直ぐ出發する勇氣も無いので、木蔭に暫時休んでゐると、大津通ひの牛車が、のろり／＼

どなだらな坂を登つて行く。

日の岡峠の石碑を読み終つて、氷屋を出ると、地面から照り返す熱さが顔に當つて、塵埃が灰の様に舞ひ上る。草いきれする山路の樹々の緑は冴えに冴えて、雲一つ無い蒼空高く、次第／＼に頂に近くと、長閑な牛の聲がする。

日の岡峠の奴茶屋は、西と東と二ヶ所に在つて、古昔は京よりの旅を送るものは此の頂上迄來て、別れの酒を酌んだので有る。今は大きな家が唯一つ残つてゐる丈で、之ぞと思ふ影も無い。右も左も竹林で、麓の風が颯と吹くと青葉が戦いで草が靡いて、お休所の提灯がぶらりと揺れる。

坂を東に廣い／＼街道は、松山の間をうね／＼下るので、麓に展開する千町田の稻葉が戦いで、ぼつり／＼と黒い森が、島のように浮かんで、藁屋が所々に散在してゐる。

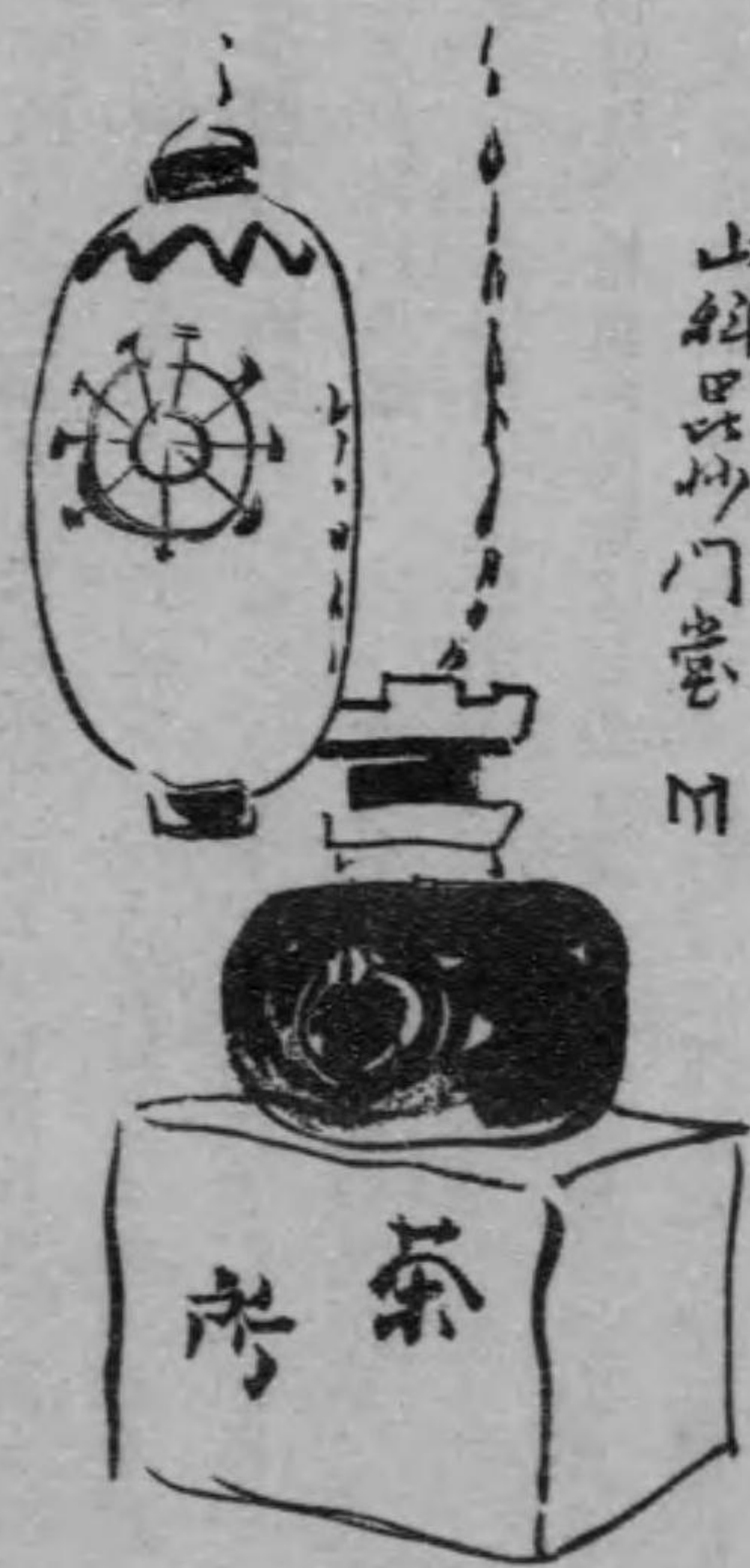
下り切つた所から見ると、大石良雄の山科の隱宅は、此所から八町許り右手の山懐、今は屋敷趾の標だけで、見物すべきものも無いこの事に、道を急い



で東へくと進んで行く。長い一筋道、毀れかゝつた街道の古家は、屋根には草が伸び苔蒸して、店らしいものは少しも無いのだ。聽て一二町續いた人家を通る

山崎毘沙門堂

と、毘沙門堂の前に来た。煤けた大きな堂内は土間になつて、暗い本尊の前に提灯が下つて、燭燭が一本微かに赤く點つてゐる。



土間の前は線香賣の婆さんが駄菓子を賣る店で、蜜柑水やラム子、肉桂、桃や西瓜が並んでゐた。山本子は蜜柑水を飲みながら、茶釜の寫生をしてゐる。

るので、自分は戸外に出て街道をスケッチする。

午に近い日は野も山も、家も街道も眩い許り照らして、東の空に白い雲が靜かに浮かんだ。毘沙門堂で聞いた奴茶屋を、訊き／＼歩いて行くと、同じ様な淋しい町が、いつ迄も續いて、遙か彼方に逢坂山の翠微、左に比叡山がぬつと頂を現はしてゐる。折から渡る古い石橋、いさゝ小川が老樹の蔭を繞つて稻田の中に流れ行くのを、何氣なく見送ると、右に煤けた飯屋が有る。間口八間許りで、店頭には草鞋や草箒が下つて、煮べの皿が三つ四つ、金網の蓋をした儘並べてある。近所で訊くと、之れが名高い奴茶屋で、之から先には、晝食をする家も無いのだ。店に這入つて裏へ抜けると、川は家の周圍を廻つて、稻葉の風はそよ／＼と、軒の風鈴に通つてゐる。崩れる様に咲いた紫陽花が、川水に映つて、蟬の聲が遠く靜かに聞えた。何か晝食の菜になるものと注文しても、鱒の煮付に鯉の焼いたの許り、箸を上げて口に入れると、痺れる様に舌を刺すのに驚いて、鶏卵と梅干を貰つ



て、漸う冷飯を流し込んだ。時計を見ると今一時を過ぎた許りで、眞夏の光りは隠すもの無く照り盡し、遙か後方になつた、天智天皇の御陵のあたり、黒く繁つた松山の頂に、

小軒越



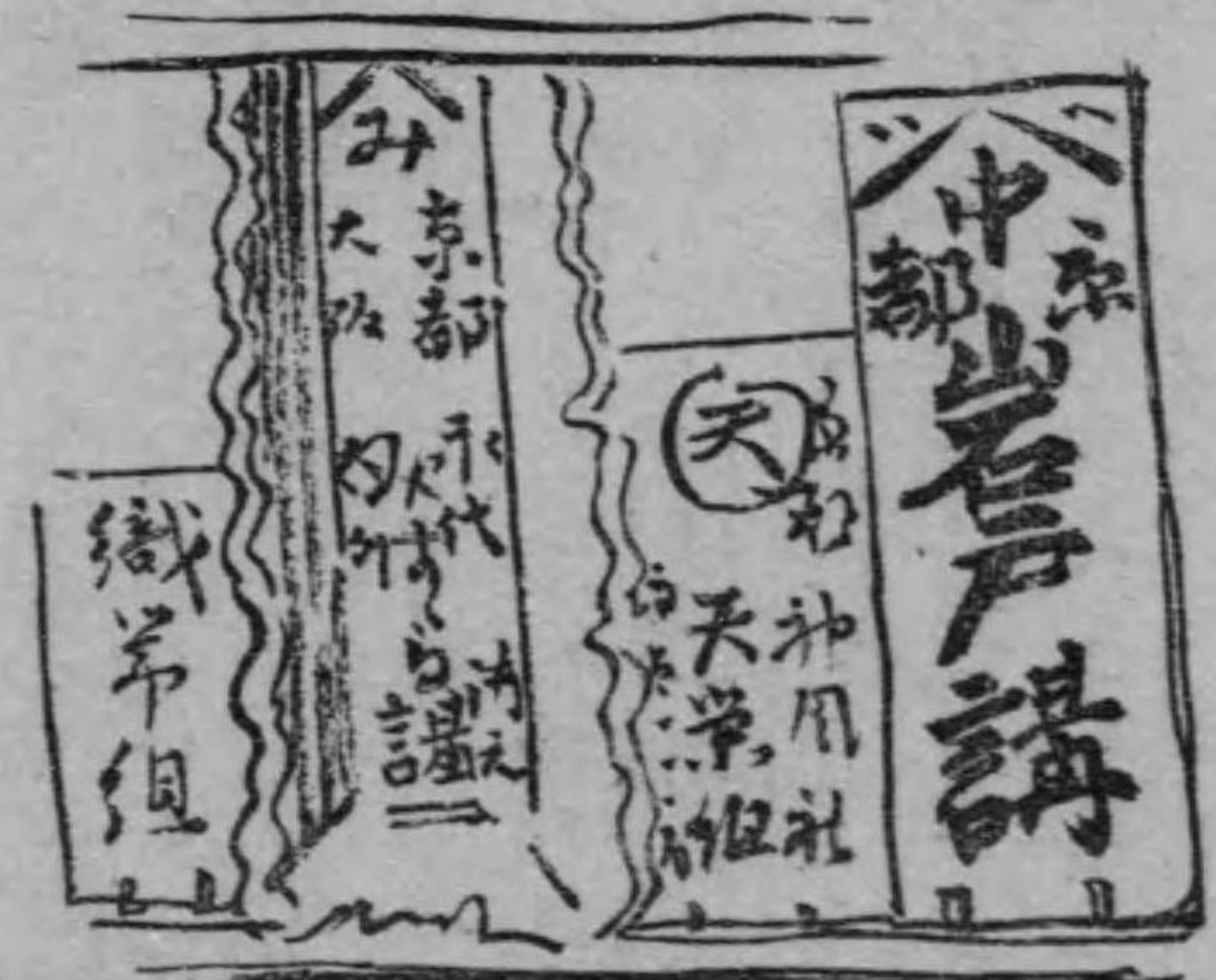
むく／＼と湧く入道雲が、白く綿の様に輝いた。廣い街道の寂しい町、古昔榮えた跡を辿つて行く。道は少し登りになつて、桐畑で蟬が鳴く、町が盡きると廣漠たる緑の野邊、山々遠く退いた醍醐のあたりは、東山の山脈が低く消えて、瀛車の烟が、白くぼつと上つた。左は三井の小關越、畦の間をうね／＼白く續く道を、鍬を擔いだ百姓が、ぶらり／＼と歩いて行く。稍急になつた坂道の左右は、

石垣の間を水が走つて、苔に埋つた大きな水車が、がたり／＼と廻つてゐる。鶏がコ、と鳴きながら、道を横切ると、石垣に咲く撫子の花が風に揺れた。登り切つた所は町が兩つに別れて、鍛冶屋の前に、追分道の古い石標が立つてゐる。日影に遠い草木の匂ひと交つて、深い／＼溪底の、水氣を含んだ風が颯と吹く。逢坂山の濃い緑は、一歩／＼に迫つて来て、見上る峯の葉山繁山、雲は悠々として動いて行く。

追分から牛車に尾いて、二町許り登ると、走井の前に出た。水淺黄にはしりゐると白く染め抜いた布簾が下つて、間口が十間許り、廣い土間を這入ると、中に瀟洒した座敷が有つて、後ろは山に面してゐる。何百年ともわからぬ迄、煤けた天井は額堂の様に、岩戸講、天榮組、永代一心講などの、講中の額が一杯に懸つて、白群や、白緑や、古るびた金色の彩色が、仄暗い中に微かに輝やいて、店の中央の土間には石で疊んだ噴井戸から、透き通る様な奇麗な清水が絶間なくさら／＼溢れてゐる。石は一面の青苔に埋もれて、水で



濡れた色は、見るから涼し相に、前を通る馬士や、人足や、荷車曳く牛飼迄立寄つて、思ふ様飲んで行くので、自分も荷物を椽臺の上に置いた儘、噴井戸の前に近寄つた。小柄杓に攪ひ上げて、口を附けると、冷りと水のように、舌に泌みる。手拭を出して、顔を洗つて、元の部屋に歸つた時、走井餅を盆に載せて前に並べた。



大津走井餅

後ろの山は自然の岩石を疊んで、青葉を煽る風が涼しく、流れ落ちる苔清水の音さらさらと、白百合の花が甘い香を送つて来る。餅を喫つてから、山本子が額と店頭を寫生する間に、自分は噴井戸を描いて了つた。店頭には十八許りの娘と、二十許りの女とが、餅を作るのに餘念が無いので、紅い襷をかけた後姿に、戸外から漏れる障子窓の逆光が、面白く射して、暗い中に動く人と、明るい表の強い日光、青葉の色の對照が恰で繪の様に思はれた。





日盛り道の土の匂ひは、眩い許り照り込んだ大地から起つて、草は皆細く萎れてる。走井から僅か上ると、大谷の停車場で、崖上から瞰下ろすと、低く「京」に向つて、西に駛る軌道に陽炎が立つて、ざら／＼光る。停車場前には、二二三の宿屋が有るのみで、いと寂しく、猶四五間登つた所に、蟬丸の社が有つた。



蟬丸の社 四

樹深く繁つた石段を、二十段程登ると、稍平らな地面に青苔が生えて、右に一段高く蟬丸の社が有る。上の社と稱へて、後ろは日に赤い山松の林、素木の小さな祠の前に門が有る。知るも知らぬも逢坂山の關路の趾に、蟬丸が琵琶を抱いて、松風蘿月を友とした古昔を思ふと、何と無く今廢れた、町の様子迄が物淋しい、身はおほけなくも時の帝の皇子として、御運拙なく盲目と生れ給ひ、花の遊び月のまどるにも、只慰むものは、一面の琵琶、草深き露を分けて、逢坂山の松風に、斷腸の思を歌はれた尾上の松は、彼のあたりか、溪川の音は彼の響かと、暫時立つて四邊を眺めてゐると、雲は悠々として動いて、大空渡る風の音が、松の梢を傳つて來る。折から石段を上る足音がするので、殊勝らしいと思つてゐると、登つて來たのは町の料理屋の女で、薄化粧に紅濃く點して、荒い中形の浴衣を着てゐる。自分等は此所の寫生を終ると、急しく元の街道に出た。

嵐氣搖曳せる逢坂山の中腹、緑に更けた山又山は深く繁つて、右も左も見上

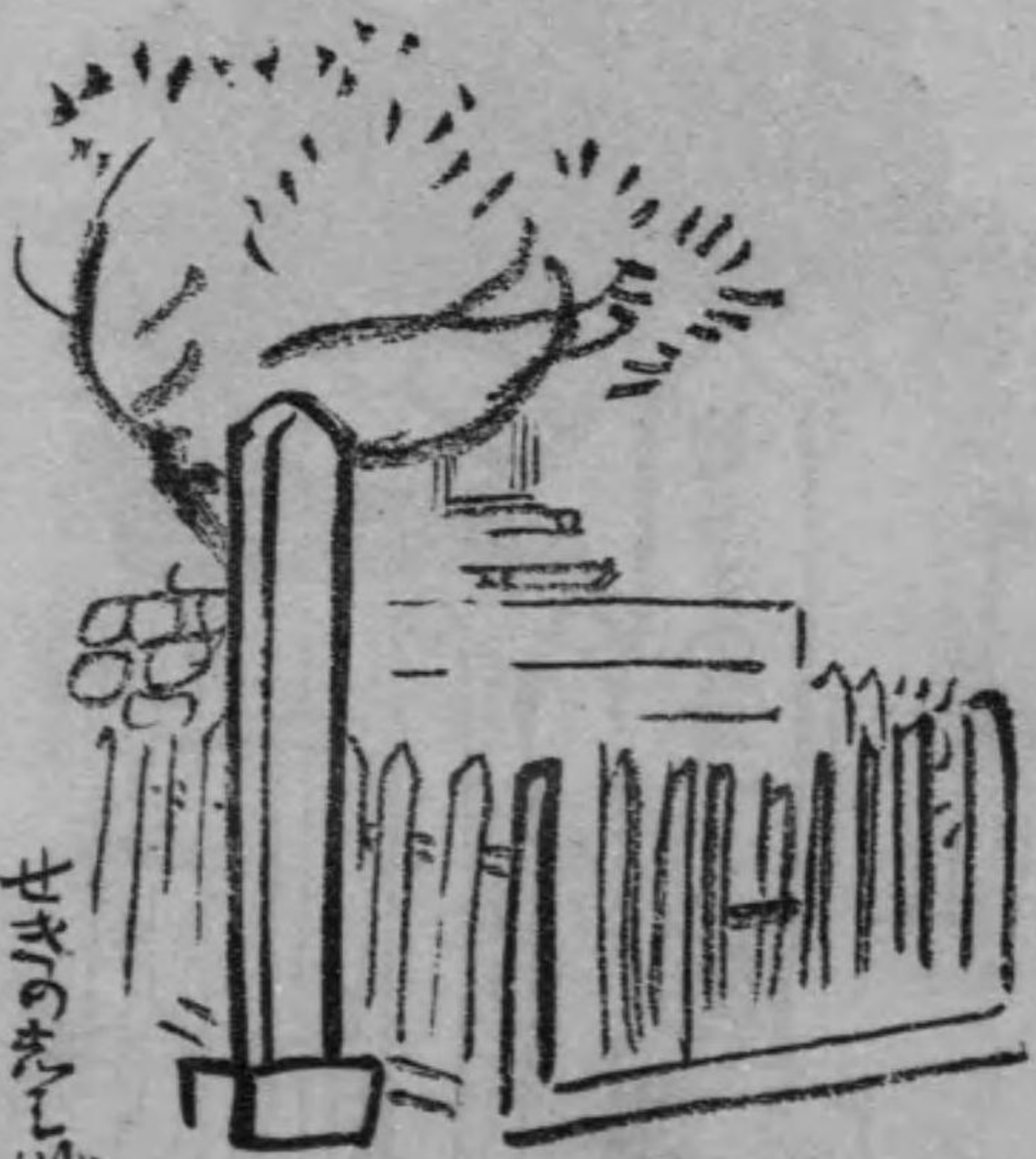




四

る様な高い松、立腐れの草屋が二三軒ある前を通ると、青薄が恣に亂れて、高い／＼木の間から、蟬の聲が落ちて来る。石の大きな常夜燈に、逢坂山と刻つたのが立つてゐて、火を點すと見えて、油の痕が黒く残つてゐる。稍や下り坂になつた日蔭の道は緑が戦いで、色種々の花の千草が幽かな風に靡いてゐる。近江路から來た俣が二輛、常夜燈の彼方に隠れて了ふと、人影見えぬ大津街道は、寂莫として音も無く、其所とも知れぬ溪底に、蝸の聲が物悲しげに聞える許りだ。

蟬丸の中の社を過ぎると、道は下りになつて、日影に疎い木の下蔭を、涼しい風が吹いて来る。逢坂の關の舊跡は、此のあたりかと眺められて、草深い



廿六のきりし 四

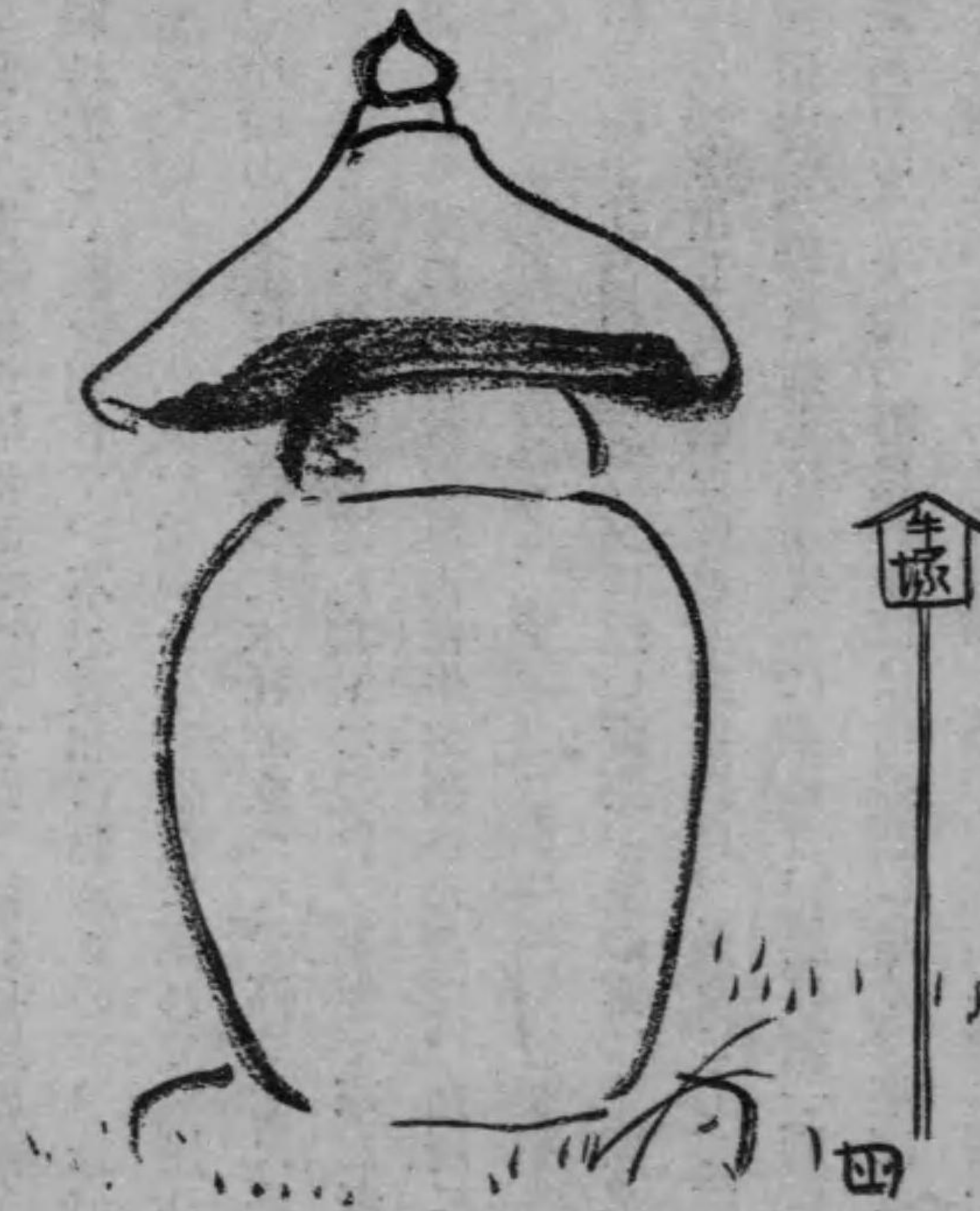
彼方此方、古昔の人が駒止めて、之から先は、草枕ひき結ぶ關の東と、都を顧たのも偲ばれて、道の邊の名も無い草花も、何とは無しになつかしくなる。遙か後ろを顧れば、見上る様に高い尾上の松の簇立に、赤々とした夕日が射して、禿げた赤土山は愈々赤く、緑に暗い麓路は蒼茫として、古びた廢驛の淋しい家々から、仄白い烟が立昇る。關の清水の趾は、路傍の左に在るので、蟬丸下の社と記し



た、木標を見て中に進むと、敷石が七八間續いて、小さな木柵に圍まれた、小さな池の石垣の上  
に、二尺位の祠が有  
つて、枝葉繁つた椈  
の木が横がつてゐ  
る。柵の傍にせきの  
清水と記した木標が  
立つのを、山本子が  
寫生するので、自分  
も傍から描いてゐる  
と、暗い森の彼方は  
明るい草原が續い  
て、犬の聲が遠くに聞えた。漸う町に近づいたと、話しながら街道に出ると



黄ばんだ空に雲  
の峯が立つて、  
遙か大津の町の  
瓦を隔て、琵琶  
湖の水が深藍色  
に、濃い一線  
を描いてゐた。  
鍛冶屋の店から  
トンカン〜  
と、懶い響を傳  
へて、鶏犬の聲、  
手車の音、夕に  
迫る町に這入る





と、左に狭い小路の角に、關寺趾の石標が立つてゐた。穢い長屋の前を通ると、裸体の女が内職に忙しい眼を向けて、不思議相に眺めるので、急がしく駆け抜けると、突當つた所が廣い草原、柔かい草が縦横に亂れて、崩れかゝつた石階を登れば、中段の草叢に倒れ懸つた木札が立つて、高さ七尺許りの大きな石塔が有る。牛塚と記いた文字も消えくゞなのを、下りて來た老僧に尋ねると、古昔關寺建立の時に、石材を運んだ牛が倒れたので、此所に葬つたと教えて呉れた。

登り切つた所は、町を瞰下す高い山で、夕に近い大空の夏の雲は、湖水を隔てた三上山のあたりに湧き出して、濃い藍色の琵琶湖は、渺々として遠く連り、禿げ山續きの鏡山一帶、横日射し添ふ光りに蒸れて、雲は刻一刻紅くなるのだ。瓦葺粉壁幾萬戸の、大津の町は、半ばは山の蔭に暗く、半ばは斜陽の彩れて、眩い許りに輝いて、湖水を渡る漁船の笛が、遙かに遠く響いて來る。

一代の佳人小野の小町が、住んだので名高い關寺は、三井寺の別院で、前に大きな池を湛へた立派な寺で、書院から丁度湖水を見る事が出来る。池の渚の菖蒲が長く伸びて、すい／＼と青い菖が、涼しげに靡いて、夕暮急ぐ蝸の聲がする。山を繞つて小高い松山から、湖水を描かうと、坐を占めると雲は爛々として紅く輝やき、次第／＼に暗くなる大津の町は、一瞬／＼に暗さが擴がつて、湖上に浮かぶ眞帆片帆が、微かに白く映つてゐる。

町に出てから名物の鮎鮓を買ひ、馬場の町に着いたのは、夕闇暗き午後七時、ほのかに光る燈火は、オレンジ色に靄の中に輝やいて、空から山、山から家、湖上から擴がる水氣は、見る／＼濃霧の中に、凡てのものを隠して了つた。

二

朝霧深き七月の東雲近い空は、星の光りもほの白う、夢の醒際に似た瞬きが



淡くなつて、湖上を渡る風が、窓から涼しく吹き込んで来る。柳の糸が靡いて、朝立ちの旅人の姿が、狭霧の中に消えて行くと、何所とも無く遠い山寺の鐘が鳴る。静寂極まる湖畔の宿の、夢ともなく現とも無い、冥想の裡に佇んでゐると、急に忙しい停車場の鈴が鳴つた。大津行の汽車が出るのである。自分は山本と朝响を済してから、一枚寫生をして石山に行かうと、準備に取かゝると、いつしか午を過ぎて了つた。

道は廣いだら／＼上り、白けた砂地に日は眩く輝やいて牛車の音も長閑に聞え、長く垂れた柳の緑は道の兩側に並んでゐる。宿から頼んだ俵に乗ると、長い／＼道は真直に續いて、右は小山續きの麥の畑、桐の青葉の中に蟬の聲がして砂を吹いて来る風が、ぼうつと熱く顔に當る。澄み切つた空に、一點の雲も無く、霧晴れ渡つた琵琶湖は紫藍色に、白帆が淡い夢を浮べてゐる。麥生の波のなみ伏す方に、日を受けた比叡山が高く霞んで、志賀唐崎坂本の、西近江路の湖づたひ、コバルトに消ゆる比良のあたり迄、一望の下に見え渡

るのだ。白い制服を着た師範學校の生徒が、青い畑の中を歩いて行くのを、車上ながらに見送ると、いつしか人家の多い所に來た。道の突當つた所は、最う膳所の町で、右に明神の社が有る。町は京風の低い赤壁の家が續いて、犬の寝てゐる外は、人の姿が見えないので、淋しい事は空屋の様だ。膳所の城は今全く跡も無く、監獄署の在る所が、元の城趾だと車夫の話を聞いたのみで、長い街道を辿つて左に曲がり、又左に折れると、小さな石橋の邊に來た。

右も左も一望青々とした田圃ばかりで、稻穂の波は緑を敷き、右手に延びた山々は、遠く南の方に連つてゐる。橋から向ふは長い／＼松並木で、梢を渡る青嵐が、車上ながら涼しく聞えて、日影漏れ来る松の下は、草の香高く風に纏れて、時々松の實がばさりと、土に落ちて来る。眞帆片帆浮かぶ琵琶湖の、小波も無い穏かな水は、斜めに受けた日に、藍の色が愈々濃く、比叡の上には、今しも白い小さな雲が浮かんだ。深田を耕す百姓は、鍬の刃を光ら



して、其れを見守る假穂の庵が二つ三つ、水の中に立つのも面白く、懶けな牛の聲が、遙かに山の裾から聞えた。沼田に駒を乗り入れたのは彼のあたりかど、松原越しに、草に埋れた隙を見るとき、並木のはやくも盡きなんとする手前に、土饅頭が有つて、一本高い松が、道を狭んで立つてゐる。其所を這入つた所が、今井四郎兼平の墓だど、車夫の教えて呉れるのを聞きながら、彼方此方を見廻した。

木曾の深溪水清く風爽やかな山中に人となつて、冬は御嶽の雪に身を鍛へ、夏は木曾川の早瀬に、水を潜つた少年は、過ぬる壽永の昔時、信越を平らげ、幾萬の兵の將として、砥並俱利迦羅峠の戦に、經盛が拾萬の軍を打破り、榮華の夢未だ醒めあえぬ、平家の一門を追ひまくつて、一度天下に號令して、旭將軍義仲となつた。されども京都の地は、長く幾萬の將士を養つて、滯陣久しきに亘るには、木曾や越後の糧食を運ぶに、余り遠く離れてゐるのだ。源氏の棟領たる、鎌倉の頼朝からは更に糧食の後援が無い。茲に京畿の近く

から、財を掠めるものが出来るのは、餘義ない事で、後年建武中興の時にも、足利尊氏を京都から、西海に追ひ落した新田勢が、楠正成の遠謀に依て、貯へた糧食で僅かに、生命を繋いだ位だ。宇治瀬田の戦ひ敗れた木曾勢は、主は家來を尋ね、家來は主の生死を知らんが爲めに、尋ね／＼と、粟津の松原に落合つた。時は壽永三年正月二十日、湖上を渡る北風に凍つた深田は、満目蕭條として、野に山に満ちた白旗は、鎌倉勢の幾萬騎、味方少なに討ちなされた義仲が、深田に馬を乗り入れて、遂に流れ矢に悲壯な最期を遂げた時、兼平が悲憤の様は如何なであつたらうか、彼の山も、彼の松原も、敵の矢叫ひと太刀の切先を口に含んだ、形相までが想像されて、一歩／＼に隔り行く、松原を見送つてゐると、並木の松は次第に小さくなつて、途切れ／＼になつて来る。湖水を隔て、近江富士と呼ばれる三上山には、今しも蒸す様な夕日が、斜めに照らして、其の裾に連る田上山や、鏡山の禿げた赤土山に、紫が

つた靄が立つ。



松原の盡きた所は最う石山の停車場で、蹈切を越すと向ふに、廣い川が流れて、長い橋が架つてゐる。

「彼れが瀬田の唐橋ぞすえ」と、車夫が教えて呉れたので、車上ながら眺めて、明日歸る時寫生しやうと、山本子と話すと、道は川に添ふて進んで行く。野邊の青草は岸の蘆の葉とすれ／＼に、野薔薇の花が白く一面に咲いて、石山の上に懸つた灰色の雲に夕日が射して、瀬田川に映つた水の色は、燃える許りに美しい。

道は寂しい古寺の前を過ぎて、老樹鬱々とした片山蔭に這入ると、冷々とした夕風が、川から吹いて来て、暗い水にすい／＼と立つ水草が、如何にも涼しく動いてゐる。夕涼かけて京へ歸る人の二人三人、多くは女連の客が、螢籠を携げて、ぶらり／＼と來るのに遇ふと、京都の長閑かな風俗が、如何にもなつかしい。川に沿ふた道は、次第に人家に近づいて、最う四邊が薄暗くなると、樓々に點す提灯が、仄かに光つて、舟遊びの客の歡聲が聞える。自

轉車で歸る男の提灯は、螢を携げてゐるので、見るからに涼し相だ。町に近づくに兼て柳屋に行く筈で有つたのが、混雜してゐると云ふ車夫の注意の儘に、松月樓と云ふのに俾を下す。

「好う御出でやす」と、宿の女中が案内をする。宿は川に接した一番端れの家で、二階に上ると、素木の高欄に射す電燈眩く、吹上る川風に提灯が動いて、そこはかと無き夕闇を、一つ二つ螢が飛ぶ。

汚れた洋服を浴衣に着替えて、風呂から上ると、黄昏の色は次第に擴がつて、稍ぼんやりした川面に、今しも白い大津通ひの汽船が、汽笛をポウ／＼と物淋しく鳴らしつゝ、甲板に數十の酸漿提灯を點した儘、靜かに岸を離れる所だ。紅く黄ろく、水に映つた火の流れは、渦巻く様に動き、空には星の光恰しげに瞬いて、次第／＼に、湖上はるかに浮かんで行く人々を眺める様に、いつしか數が増えて來る。軒から山、草から松と、飛びかはす螢火の影は蒼く水に亂れて、竿を持つ子供の彼方此方に走るのも賑やかに、追はれ追はれ



た螢が、軒先近く逃げて來ると、電燈の強い光りに消されて了ふ。自分は裏の廊下に出て、緑に暗い裏山を見ると、螢が幾つと無く飛んで居て、家の中迄流れて來る。捕る氣も無しに一つ二つ捕つて、蚊帳の裾に放して置くと、青い光りが水の如くに美しい、次の間に來て膳に向ふと、電燈に集る小さな蟲が、數限り無く飛び廻つて、皿や小鉢に落ちて來るので、蚊帳に這入つて、漸う夕餐の箸を上げた。

更け行く儘の夜は月も無いので、淋しう静まつて、螢狩の客も、大方歸るものは歸つて了つた。只池の様に滑らかな、瀬田の川面に、數多く吊した遊山船の、提灯の火が揺れて、ちら／＼と流れるのが、火龍の様に美しい。折から何所からと無く歌の聲がして、歩いて來る人の足音をふと見下すと、二人連の若い娘の髪の中に、螢が止つて光つてゐる。餘り思ひも寄らぬので、猶好く見ると、水玉位の金網の簪に、螢を入れて挿してゐるので、暗夜ながら涼しく光る螢火は、烏羽玉なせる黒髪に、青い光を添えてゐるのだ。

京なればこそ此の風流と、何とは無しに、朝顔日記の中の、宇治の一段を思ひ浮かべて、遊山船の方を飽かず眺めた。  
静かな夜の波も動かす、稍冷まさる川風が、颯と高欄の上を渡ると、青簾が揺れて、蚊帳が戦ぐ。百合花の香りが微かにする。

三

眼覺て聞けば石山寺の鐘の音が廣い川面に響いて、朝嵐に散る白百合が、笈の水に浮かんでゐた。水烟朦々と立つ瀬田川に沿ふて、石山寺に參詣しやうと、立並んだ宿屋の前を過ぎると、左は満々たる水に若蘆が戦いで、小舟が岸の小波に揺られてゐる。名物石山石や螢籠を賣る店を素通りして、石燈籠の立つ涼船の棧橋に來ると、其の直ぐ前が柳屋で、右に曲ると稍廣い道は、だら／＼上りになつて、未だ熱く無い日光が、長い影を曳いてゐる。二十間



程進むと、最う石山寺の門前で、朝露に濕つた砂は、箒目麗はしく掃き清められ、定紋の着いた高張提灯が二つ、門の左右に立つてゐる。之れや古昔京都から、度々行幸が有つた月の名所、奈良の東大寺建立の餘材で、建てた御堂かと思ひつゝ、敷石の上を踏んで行く。楓の若葉に繁つた道の左右は、寺中の寺々であるが、白い土塀が崩れて、苔が蒸して、門は閉されたまゝ、庫裏も荒れ果て、人の聲さへ聞えないのだ。見るから凄まじく生ひ茂つた雜草は、肩より高く荒れに荒れて、倒れた堂の後ろは、直く石山の崖に連つてゐる。門に高張を出してゐるのは、僅かに二三軒で、其れさへ哀れになつてゐた。次第／＼に進むと、右に御手洗の池が有る。良辨僧正が、建立當時の池で、蓮花の中から噴く水が、影をひたして流れてゐる。其の前を二三歩進めば、右に石階が有つて、危く滑る苔は、朝露に濡れに濡れて、溪風に戦ぐ青紅葉が、手が達く迄に被さつてゐる。昇り切つた所は、左が片袖の御影を納めた、蓮如上人の舊跡で、鹿の子の御影も残つてゐるのだ。敷石を突當つた所は、

灰色の巨岩が、重なり重なつて、其の上に繁る樹々の緑、多寶塔、右の高い崖の上には、古びた鐘樓が立つてゐる。折からの風に、楠の香が高く薫つて、本堂の讀經の聲と、鉦の音が、全山の木立に響き渡つた。

御影堂の横は即ち本堂で、階段の上が、紫式部の源氏の室だ。階段を昇つて左に廻廊を廻ると、素木の高欄、素木の丸柱、青葉の繁りに暗い室内は、十三所巡拜の納札が、彼方此方に貼られて、更に暗い内陣には、御燵の光りが幾つと無く輝くのが、何と無く寂しい中に、尊く拜まれた。折から登つて來た年老つた巡禮は、太い柱を一廻りして、内陣の前で跪きつゝ、南無大慈大悲の觀世音菩薩と拜んでゐたので、自分は暫時、其の後姿に眼を止めた。幾年月の雨や風や、古びた文字の笈摺は、西國三十三番巡拜と、消々に記されて、今日は近江路、明日は伊勢路、世を終る迄經めぐる人の胸の中には、過ぎ來し方の悲しい思出も多からう、旅より旅に見る月にも、語らふ友なき情を抱いて、獨り我が身の影を顧みつゝ、願ふも果敢ない未來をのみ、頼む



心は、如何に寂しいもので有らふか、過ぎ來し方の涙は、又も行末の涙ではあるまいかと、暫し其の人の行末を思ひつゝ、一步／＼と階段を下つて行く後姿を見送つた。

古びて暗い本堂から外に眼を移すと、若葉青葉の夏紅葉に、日が射して、明るく風に簾つて、丸柱の前の長い提灯が、ぼんやり白く揺れてゐる。堂内を吹き抜ける山々の朝風涼しく、御燈火の光を揺がして、縷々として糸より細い、香の烟りの立昇る前に叩頭くと、幾つと無く並んだ三寶の上の、紅白の幣束が眼に止つた。堂は内陣との境が屋根を繼いであるので、内陣の建築は、良辨僧正が八葉の蓮華形の石上に、觀世音の御像出現しましたのを感應して、建立した時の儘で、其後秀吉の世になつて、淀君が建て増したと傳へてゐるのだ。

自分等は御札や御燈を賣る番僧に、拜觀料を納めると、聽て五十許りの老僧が、先に立つて案内をする。暗い陰森の氣に満ちた内陣は本尊が丈六の觀世

音、其の前を通つて左に折れると、先に立つた老僧は寂ひた聲で。

「抑も當山は、今を去る事千六百十二年、聖武天皇様の、天平勝寶四年の創立で、御座いまして、開山は良辨僧正にいらせられます、八葉の蓮華の天然の岩の上に、正觀世音菩薩が出現しました御夢想に依りまして、建立なされましたもので如意輪觀音の御本尊は、聖德太子の御作、御丈六寸で御座いまして、之れを腹内に納めて、良辨僧正が丈六の像を作られました、左の御厨子は執金剛神、右の御厨子は金剛藏王様であります、三体とも國寶で御座います、御拜が濟んだら、すうつと此方へ」と、暗い格子の前を通つて丸柱を廻ると、本堂の横に出た。

「此方に入らせられる不動明王様は、弘法大師御年四十二歳、厄除けの御作で御座います、之も國寶であります。之れからすうつと、並んで入らせられますのは二十八部將、後方の正面が如來様で御座います。此に納めて御座いますのは、良辨僧正が天然の岩の下から、掘り出しました寶鐸で御座います。」



と、暗い御堂の裏を案内する。有るか無きかの風に燈火が揺れて、燭が真直に立つかと思れば、横に靡いて、蠟が哀れに流れて来る。廻つて来た所が源氏の間である。一段低い中に這入ると、古い疊が四疊位、只窓から明りが射し込む許りで、天井はぼんやり暗く見える。中は紫式部が、用ゐたと傳へられる、牛と鯉との彫物のある硯が一つ、文机の上に載せられて、正面に土佐光起筆の、紫式部の書像を懸けてあつた。

此所から見ると、今は正面に樹立深く繁り合つて、向ふの山も湖水も瀬田川も、見る事が出来ぬので有るが、嘗ては此の山の堂塔伽藍は、十七宇に及んで、石階の前にある毘沙門堂は、元は北の方に寄つて、谷二つ隔てた十五六町も向ふに置かれた堂であつた。紫式部の時代には、彼の部屋から湖水の景色が眺められたかとも思はれた。寂しい秋の深山の風が静かに、僧房の窓に音づれて、木の葉がばらばらと落ちて来る時、黛鮮やかな、髪濃い絶代の佳人が、經卷をさし置いて、今しきやかに登る月を、湖上はるかに眺

めた風情は、思ひやるだに、繪の様であらうと思はれる。

本堂を降りて、大きな岩の間を、足元危く登つて行くと、經藏が有る。其れを右に崩れ懸つた石段を上ると、滑らかな苔

石山移転塚

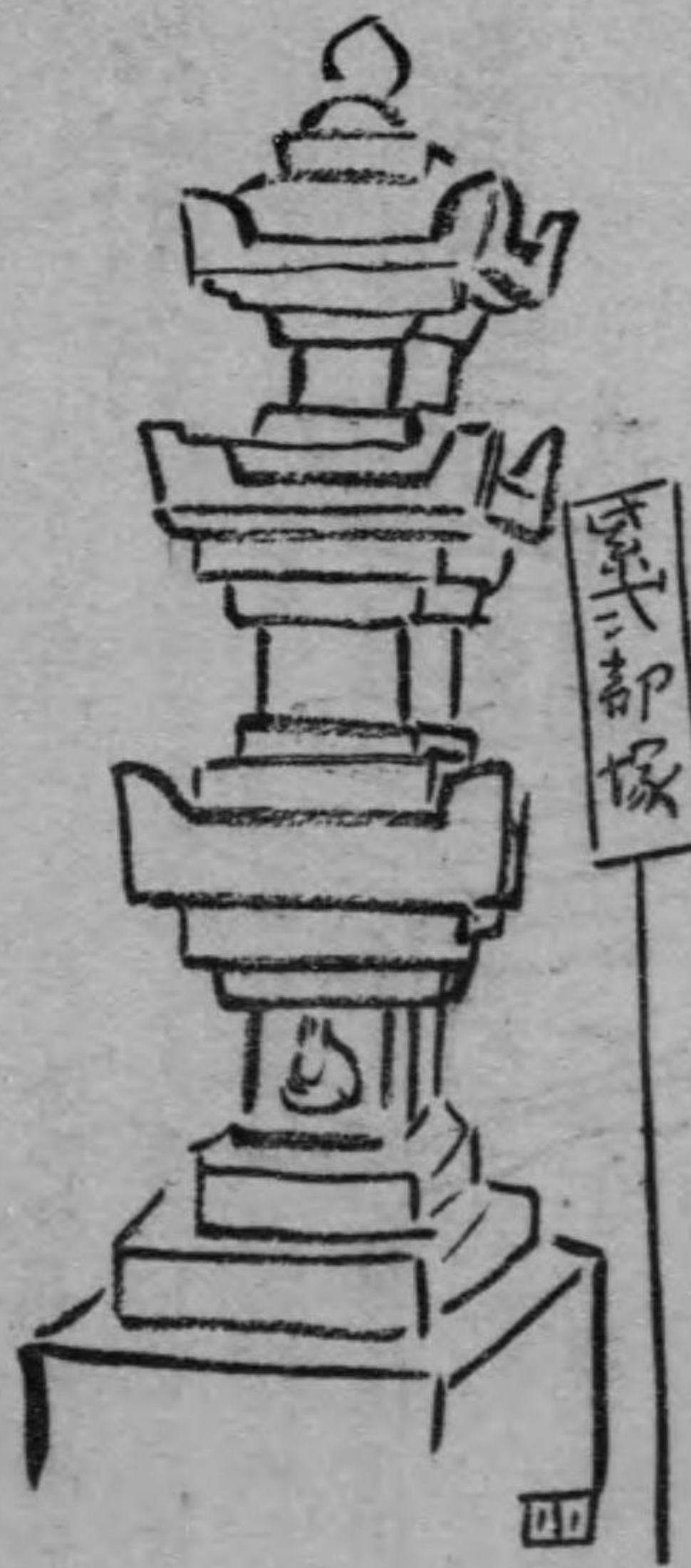
が一面に生えて、此所に頼朝公の墓が有つた。小さな古い角石の塚で少しく離れた所に紫式部の塚が有る。三重の石塔は稍大きく、雨露に蒸された苔が蔓つて、臺座は草に埋れて



M



ある。見上る前は楠の老樹が枝を伸して、青葉の香高く薫る廣い平地、多寶塔の九輪が、青空高く聳えてゐた。寶塔の高さは五丈六尺、廣さ三間、本尊は大日如來、賴朝の建久年中の建立に係つて、四隅の柱に三十七尊の彩畫、今を去る事七百二十年と、記した木標が、階段の前に立て、あつた。



多寶塔の前を東に向ふと、石山の一角に出るので、下は瀬田川の流れを控へて、青葉の山々に對し、北は遙かに瀬田の唐橋を隔て、渺茫たる琵琶湖を望む大觀は、何とも云へぬ廣い景色である。斷崖の右に立つ草屋の亭は雨に寂て、周圍に廻らす木柵も、今は時代が附て灰色になつてゐる。

る。此の名高い觀月亭は、保元年中後白河天皇行幸の時、始めて建立以後數度の修繕を経て、明治十一年 今上陛下行幸迄、七百五十年と制札に記されて、黒くなつた萱藁の屋根、素木の柱、素木の高欄、月の夜ならばさぞかしと思はれる、四邊の景色に眺め入つて、寫生しながら左の方に歩を運ぶと、俎の様な形の、六尺ばかりの大きな低い腰掛が三つ並んで、眼もはるかなる琵琶の湖は、鬱蒼たる樹々の梢の上に、果なく遠く續いてゐる。紫式部の三七日の參籠の時も、今我が蹈んだ土を蹈んで、彼の艶麗比なき、光源氏の物語を、此所あたりで考えたであらうかと、彼方此方を眺めつゝ、道を變へて降つて來ると、岩根こやしき崖の下には、本堂御影堂、毘沙門堂、青葉がくれの蝸の聲が、眞晝ながら淋しく聞える。

紫ばんだ灰色の巨巖は、九十九折なす階段になつて、中段の高い所に鐘樓がある。東西九尺五寸、南北一丈五寸、龍宮より上りし功德成佛の鐘、男女とも信心をつくべし。慶長年中秀賴卿再建、今を去る事三百年と、記した



制札が階段の下に立て、ある。雨露に朽ちなんとする廂、古りたる階段、幾百年の長き、幾千幾萬の巡禮が、登り降りした足の跡に、薄くなつた踏み板は、古昔の儘に残されて、今其の一階／＼を、自分も等しく登つて行くのだ。狭い階段を、欄干に手頼りながら昇り切ると、徑五尺位の古鐘が有る。繪にす可き所でも無く、鐘の形にも變つた面白味が無いので、下りて來ると、岩と岩との間を、本堂で遇つた巡禮が上つて來て、木の葉に暗い岩の上に、疲れた様に腰を下した。

折から石山出帆の、大津通ひの汽船の笛が、物悲しい音に響いて來て、晴れ曇りする朝の空は、淋しい雲の影に襲はれて、樹と云はず岩と云はず、本堂御影堂のあたりまで、一時に暗くなつて、先へ／＼と動いて行く。願れば自分も旅から旅をさすらひ行く旅の畫家、彼れも旅より旅を迷ふて行く、十三所の札巡禮、思ふ事は違ひ、行く所も西と東と別れるのであるが、此くして今此所に居る二人の者は、世々に相遇ふ事は無いのであらう、不知の人

は遂に、不知の人として終るであらうか、幸多くあれ南無や大悲の觀世音と、彼の旅人の上を祈りつゝ、自分は石の階段を降つた。汽笛は又も川に響いて居る。

四

漣も無い静かな水に、白鳥の様に浮かんだ、大津通ひの純白の汽船は、影を逆に涵して、客の乗るのを待つてゐる。棧橋には年老つた船員が、繫の綱を握つてゐるので、自分等は切符を買ふと、忙しく上甲板に乗り込んだ。白いテントの下には、片田舎の夫婦連と、商人らしい男が六七人、板の上に薄縁を敷いて、足を長く伸ばしたのも有れば寝たのも有る。聽て最後の汽笛が、ポウ／＼と鳴つて、廣い川面に響き渡ると、

「ゴウヘイ／＼」と太い船員の聲がする。棧橋の男が、船に飛び移ると、水



を裁る音がして汽船は静かに水を滑り出した。  
 眼もはるに生ひ繁りたる夏草の塘は、山寺の麓から鏡の様な水面に沿ふて、  
 遙か北に擴がつてゐる。若蘆の洲から漕ぎ出す舟の、四つ手網に日光が輝い  
 て、白い水禽が中空高く飛んで行く。悠々たる青い空、溶々たる大河の水、  
 爽やかな朝風に吹かれながら、水のまにまに流れ行く面白さは、何とも言は  
 れぬ心持だ。

聽て長く突き出した青い洲の角を廻つて、後ろに樹深い石山の頂を顧ると、  
 常盤木の森は黒く、上へくと重なつて、山々の續きが、長いうねりを作つ  
 てゐる。麓路の細い坂を走る俣も小さく見え、川に臨んだ樓々の建築も、い  
 つしか遠くなつて行くと、新に虹の様な瀬田の唐橋が、行手の水上に現はれ  
 て岸の柳が長い緑を映してゐる。

岸に近くなるまゝに、汽笛が鳴つて、甲板の人が動揺めき出す、手廻りの荷  
 物を持つて、待つてゐると、水草がすいすいと立つ棧橋に、船が横着けにな

つた。テントから出て、棧橋を渡ると、長い岸の柳が、さらさらと靡い  
 て顔にかゝる。日光は丁度眞上から照らしつけて、荷を下して憩む片蔭も無  
 い、切符賣場の中で、彼方此方を見廻すと、十間許り川下に、小さな社が在  
 つて、松の繁つた森が有る。一行は急いで草の中を歩いて、鳥居を潜ると、  
 川に添ふた玉垣は、いたく破れて、檜葺の祠の屋根に、松葉が積つて、濕つ  
 た地は苔や雑草に埋れてゐた。そよ吹く風に汗を拭きながら、祠を視ると、  
 右は龍神の社で左は俵藤太秀郷の社であつた。幼い昔時母の懐に抱かれて、  
 俵藤太が瀬田の唐橋で、龍神に頼まれ、三上山の蜈蚣を退治した事を聞いた自  
 分は、いつか己れも偉くなつて蜈蚣を退治やうと思つた事も有つた、彼の美  
 くしい琵琶の湖、繪の様な瀬田の唐橋と、十二一重の御姫様、立烏帽子を被  
 つた、俵藤太の太將髯は、今でも鮮やかに眼に残つてゐるので、此の淋しい  
 社の前に立つて、枯れ松葉のぼつり／＼と風に落ち來る時、嘗て錦繪で見た  
 秀郷の面影が、幻の様に浮かんで來た。



此所で紀念のスケッチをして、再び橋の袂に来ると、岸に繁いだ小舟が、ゆるりと水のまに／＼揺れて、高い橋杭の太い影が、真直に下に映つてゐる。橋の上を通る車の轟き、日傘の影、長い／＼大橋小橋は、人影疎らに、唐銅擬寶珠の緑青が、古昔の姿に残つてゐる。橋を描く位置を、其所か此所かと探して、橋の上に来ると、山本子は川を隔て、石山の全景を描いてゐる、自分は橋の右に寄つて、中の島を狭んで、大橋と小橋を一つに描き始めた。折柄川上から、川下に網を打ち／＼下る船が有る。川添の船宿から出るので、船の中で漁つた魚を、直ぐ料理して天麸羅にして、試るのが名物だと、傍に見てゐた車夫が、頻りに自慢する。

日盛りの橋板は熱く、日蔭が無いので、汗は瀧の如く胸を流れる。山本子は未だかと思へば、最う道具を纏める所なので、急いで點景の人物を加へた。之から再度粟津に出て、湖水の景色を寫生しやうと、長い橋を／＼と渡つて行くと、涼しい風が絶えず吹いて、橋の塵埃がはつと舞ひ上つて、川

に散つて行く。大橋を渡れば、稍平らな小島の右に、高い松が聳え、御船宿と黒く障子に書いた、二階家が一軒建つてゐる、小橋を渡ると最う田浦道に出るので、草いきれの風が熱く頬を吹いて、蜻蛉が縦横に飛び交ふ。

粟津が原の松並木を寫生して、昨日の道を歩いて歸ると、午過ぎながら、食事に立寄る家も無く、膳所の町も通り越して、桐畑の多い淋しい畑の中に来た。ふと見るとうごんと書いた看板が眼に止つたので、二人は急いで中に這入つた、葎張の焚火に煤けた堀立小屋は、土間に長い椽臺が有る許りで、疊らしいものも無く、並べた箱を見ると、うごんの塊が幾つと無く、編んだ簾の上に載せてあつて、眞桑瓜が三つ四つ其所に並べてある。此所で饅餈うごんを二三杯食つて、戸外に出ると、午後の強ひ日光は、至らぬ隈無く照り輝やいて、道のほめきにむつとするのだ。

馬場に着いて、だら／＼下りの柳の間を、濱邊に下ると寂しい通りに出た。左に曲つて十二三間進めば、築地のある低い寺門に、義仲寺と書いてある。



敷石を踏んで中に這入ると、芭蕉の青葉を渡る風がばさ／＼と鳴つて、静寂極る狭い境内に、物を尋ねる人も無い。敷石を四五間進んだ所が義仲の墳墓で、石の柵を繞らした、小さな芝生の土饅頭の上に古びた石の塔が在つて、義仲公墳墓と書いた木札が有る。花筒に挿した夏菊の花も、哀れに萎れて、吊ふ人なき英雄の魂は、永久に此所に睡つてゐるのだ。栗津松原を通つて来て、今此の土饅頭を尋ねた自分は、嘗て木曾の旅に、義仲の菩提寺を吊ひ、旭將軍



大津 義仲寺

の生立の地に、無限の感を抱いた事を、思ひ浮べた。其れと並んで青い芭蕉の蔭に石の垣繞らして、芭蕉翁と青石を刻んだ墓は、「旅に寝て夢は荒野を駆け廻る」と、果敢ない辭世に旅の哀愁を歌つた、芭蕉翁の墓で、幻住庵は之から少し離れた所に、在つた事の事である。右には苔蒸した草葺の堂、芭蕉堂の額が懸つて、内を覗けば禪寺の様な、石畳みの奥に位牌が有る。四方に懸けたのは、蕪村の三十六俳仙で、洒脱な筆に描きなされた、繪と文字とが何とも云へぬ面白味が有るので、猶近く寄らうとすれば、扉が閉ぢてあるの





で、よく見る事が出来なかつた。

義仲寺を出て、湖水の方に真直に抜けると、其所は草叢續きの砂濱で、午後  
の日を被つた比叡山は、霞みに霞み、菊が濱一帯、黄ろい光りに包まれてゐ  
る。北は水や天なる琵琶の湖、濃い深碧色の上に、比良が峯續きの北國の山脈  
が、紫に聳えて、小島の様な白帆の影が、水平線に近く微かに見える。此所  
で用意の繪具を出して、寫生に懸ると、叡山の頂は刻一刻と光りに溶けて、  
空に黄ばんだ雲が浮ぶ、自分は更に右手の鏡山を描き初めると、山本子は生  
洲の寫生を終つて、暮るゝ間近き叡山の寫生にかゝつた。

長い夏の日も暮れなんとして、空は黄に、頂のみ紅く蒸された叡山は、麓路  
かけておぼろ／＼の夕霞、晚烟低く棚曳きわたる大津の町は、見る／＼中に  
暗くなつて、水に落ちた光りのみが、強い反射に輝くのだ。折から生洲を出  
た小さな船から、艫の音が静かに起つて、ひたり／＼と寄せる仇波が白く光  
る、矢走に歸る黄金の帆、夕映紅き鏡山、三上山上に崩れ懸つた雲の峯が、

下から次第／＼に、夕靄の中に包まれて来て、水も空もいつしか暗くたそが  
る、蒼茫たる琵琶の湖。  
東海道は百有餘里、伊勢路をかけて、旅より旅にさすらふた、前後四回二年  
に亘る長い旅は、茲に終りを告げたのである。

石部の宿

榮

寂しい山間の停車場石部に着いたのは夕方の六時だ。東海道を暫時流車で  
離れて又此所でめぐり過つた自分は砂埃の多いばさ／＼した街道を歩いて  
行つた。夏の夕陽の空は黄ろい光り未だおさまらず右も左も乾いた田甫の  
稻が日照續きで細くなつて一雨欲し相に風に吹かれて遠く赤土の禿山が低  
く連つた彼方に石部の町がほのかに見える。長い旅に疲れた身体には最  
少し位の景色では眼が覺めない。中澤君と二人黙然だんぜんでてく／＼歩いて漸  
う松並木の所に來た此所で簡単なスケッチをして町に這入る。古昔おはん長



右衛門で名高い所でおはんも伊勢参宮の歸り道自分等も同じ参宮の歸り道  
なので不思議に淨瑠璃の文句が胸に浮かんだ。



因

此所でおはん長右衛門の泊  
つた宿に泊らうかとの相談  
が出たが明日の都合も有る  
ので草津に泊る事にして遂  
う元来た停車場に逆戻りだ。  
最う四邊は全く暗くなつて  
ブラツトホームに這入つて  
待つてゐるゝ列車が着く。  
流籠車へ一番近いのに飛び  
込むゝ外に人影が見えない  
ので買切りの勢で腰を下した。  
聽て流籠は動き出す暗い室内には天井の洋燈が一つ微かに點つてゐる許り  
で暗い事はおびたらしい。

「あの甚だ失禮ですが貴下方は御参りですかお遊びで御座ぬますか」と突然  
暗い中から話し懸けた。驚いた所の段では無い、全く自分等許りと思つてゐ  
たのに急に人がゐたので飛上つて了つた。

「はアなアに遊びで御座ぬます」と云つて黙つて視た。暗い中を透すゝ出て  
來たのは二十前後の若い男で其後ろには十八位ゐると思はれる色の白い女が  
ゐる。

「左様で御座ぬますかあの甚だ申笨ますが私共は之れから京都へ歸る者で  
御座ぬますが何卒御迷惑様でも此の洞亂を買つて戴けますまいか」大きな  
洞亂を前に出した。其の聲は少し震えてゐる。

「はア其れは如何いふ譯ですか。」

「實は伊勢から京都に歸ります旅費が少し足りませんので草津迄は買つて  
御座います。今日如何しても京都に参りませんと都合が悪いのでして如何  
か助けると思召して三十錢に買つて戴けますまいか。と低い聲で云つた。  
自分は中澤子を顧みた。中澤子も其れ位なら只遣つてもと云ふ顔付をして  
ゐるので無論自分は其のつもりで



「え、其れはお困りなのは好く判つてゐます。ぢや失禮ですが五十錢お立  
 しませう洞胤は又貴下が御入用のものでせうからごうか其儘になさい」自替  
 分は銀貨を出して渡した。  
 「ごうも有難う御座います。御座様で助かります。之が四日市に居りますのを  
 連れて歸りますのに多分の金も入りましたし如何しやうか。只今まで二人  
 で色々心配致しましたので此様な厚顔あつかましい事を御願するのは實に何とも御  
 禮の申様が御座いません」と駈落者らしい二人は腰掛に両手を突いて禮を云  
 ふ。僅かの金に禮を云はれるのが却て耻かしいので返事に困つて了つた。  
 女は細面の京風の顔で物を云う聲が如何にも可愛い。石部の宿の古昔も此  
 様な事も有つたし今又偶然此様な事に出遇つたので如何にも面白く思つた。  
 流車は暗い中を走つて幾つかの停車場を過ぎて草津に着いた。降る客はご  
 た／＼と一度に騒ぐので自分等も荷物を持つて立上る。男女は急に外に出  
 てドアを開けて呉れて二人の降るのを待つてゐる。  
 「ごうも有難う御座います。其れでは御機嫌好う」と涙を含んだ聲で男女は  
 叮嚀に頭を下げた。

「やアごうも失禮しました」と自  
 分等は忙しく改札口の方に来  
 た。後を顧る。男女は未だ立  
 つた儘頭を下げてゐるので如  
 何か無事に京都に着く様に  
 此の二人の身上を祈つた。  
 暗い町に出る。涼しい夜風が  
 吹いて往來より一段高い古い  
 大きな姥が餅の店は燈火が華やかに射してゐた。



長命寺詣

那可瑳波

「夜分おそうなりますさかい」  
 と眠むそふな眼をして、婢が給仕をしてくれた八幡停車場前の宿で朝飯を八  
 時頃、ひうなのこまかい煮付を、うまいと思つて食べた。



「よろしうおあがりやす、長命寺さんへお詣りですか。」  
と、給仕を濟して、婢は立つて行つた。程なく、俚がさんじました。さ、柳のあを  
支關の前に、二人の車夫を呼んできた。  
連のA君と二人で、直ぐ俚に乗つて、長命寺に出掛ける。道は二里程もあるとい  
ふ。

長命寺は湖畔で、比良と叡山とが見えやう。嘗て船から見た友の話に、雪舟の  
畫を見るやうな處でよかつたさ、いふ事を聞いてゐた。墨畫のやうに、水彩で  
描いて見てもよからう。竹藪、漣のよせてる御堂など、いふ事も想像して見  
た。

菜畑は色づいても、朝の風は寒い、行く手の山、茂つた山、其後がすぐ湖畔かと思  
へば、あれは八幡山だといふ。湖近き八幡の町は、麓を下した家が並んで、湖の  
水が入つてきて、小川があつて、橋があつて、其の下を舟がいつぱいになつて通  
つてゐる。

町を出はづれると、茶つばい粗壁の土塀などの間に、白い花の咲いてゐる、大和  
邊の田舎のやうな氣持のする村を通つた。左三井寺、三上山といふ様な道し

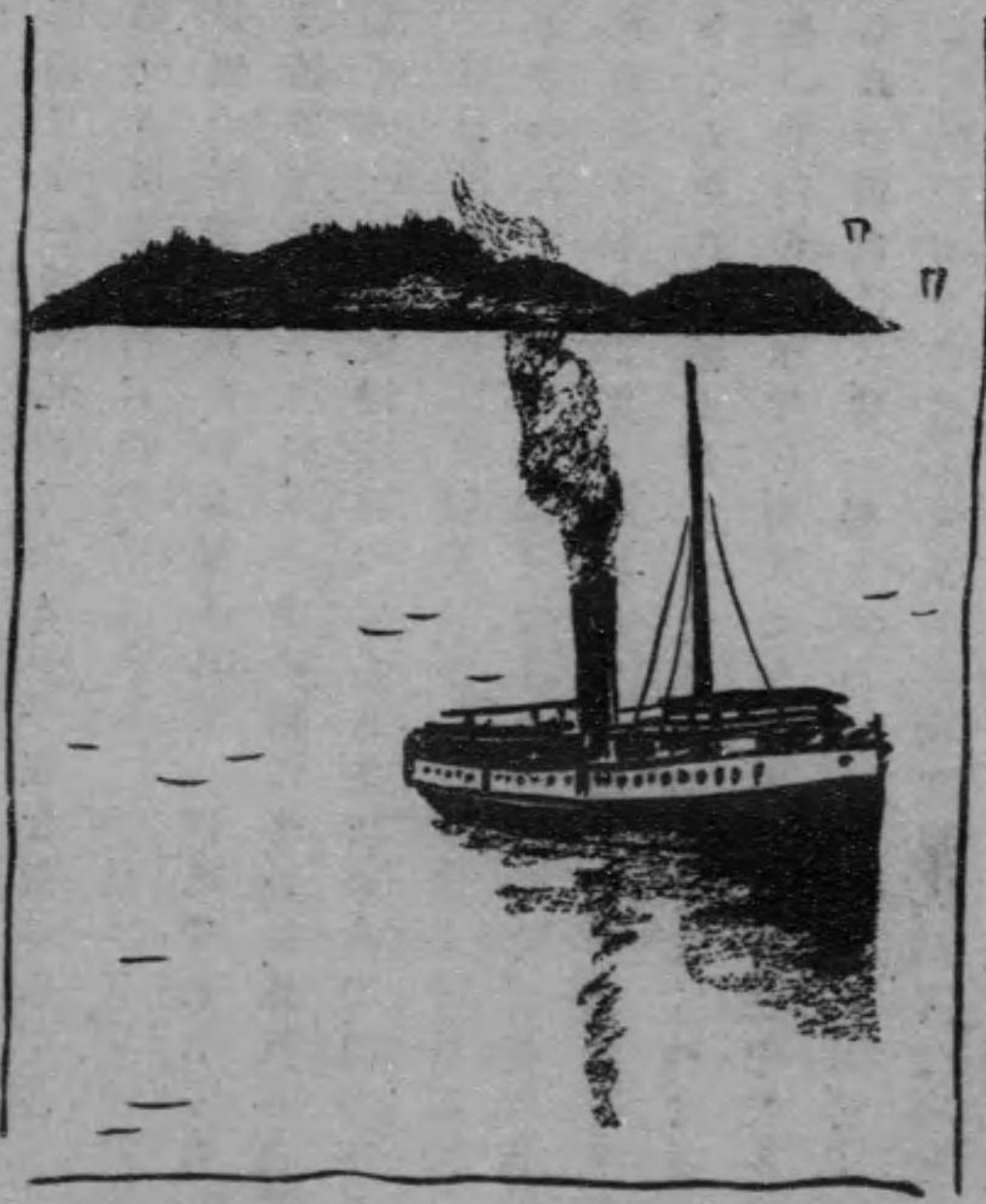
るべ見て、鎌の繪馬の澤山あがつてゐる祠の前を通る。小山の裾をめぐつた、  
田島の間を、湖の水がひたひたよせてゐる。周圍の山は近江の山だ、湖畔の  
村は長命寺というのだ、西國三十一番の札所である、千手觀音詣の人が舟でく  
る所だ、と思つて見た、ひろく、さした所に出た。

湖の風は寒い、日の光は暖い。春の徑を、俚に揺られて、夜汽車で、れたりない  
眠を、こくり／＼と車上に續けてゐた、二人は。お山の裾について、比良の高嶺  
が、ぼうつと見える湖邊に近づいて、夏蜜柑の列べてある茶店の前で、俚を下り  
た。

日あたりのよい春の長命寺の長い石段を、何階もなく上つて行く。振り返つ  
て見下ろすと、青い湖が見え、船つき場が見え、棧橋が見え、松が崎の松が見え、白  
帆が見え、蒸汽の汽笛がきこえ、比良か叡山が見え、黄ろい烟からぼうつと三上  
山、鏡山の方が見える。長い石段の途中では、幾人もなく、春の巡禮、三十三ヶ所  
詣での男女に逢つた。階段の兩側には、椿も櫻も咲いてゐる、杉もある、竹も多  
い、青い水と、黄ろい菜畑と、江州の山々は霞んで、此所に御詠歌を聞くことが、嘗  
て、壺坂や初瀬で、出會つた時よりも、よい氣持がした。而して、若い巡禮に、是か



ら美濃路へは、なんぼ程ありますか、と聞かれた時、自分は京都よりも、大和よりも、近江という詞が好きになつた。自分も中仙道を、伊吹の裾を左に、春から初夏へかけて、やつて行きたいやうな氣持ちがした。其の巡禮は、石段を下へ、自分は、鉦の音の聞える御堂の方へ、上つてゆ



この観音は、藤原末期の作だといふ事で、秘佛になつてゐる。木彫で、二尺九

寸の像であるさうだ。今はお厨子の前にお前立さう佛が見られるばかりだ。



暹路の納屋で、かなり忙しさうな若い役僧に、自分の端書へも、スタンプを一二枚頼んだ。「八千年や柳に長き命寺」という額が上つてゐて、この時夫婦連の巡禮が鉦をたいて、詠歌を勤めてゐた南無大慈大悲の観世音菩薩南無釋迦牟尼佛と唱へてゐた。この御堂の脇に、自分は、珍からず胸を躍らせた佛があつた。紅殻色の手摺の



程に、かなり大い佛體は、黒くなつて見えるが、細く長き眼は、白く光つて、生けるお人のやうに思つた。法華寺の十一面觀音のやうな感じがして、此の佛の前に立つた時。頭髮はお釋迦様の様に巻いてあるが、手に錫杖を持つてをられるの、袈裟のやうな物にかけて居られるの、自分で分は地藏菩薩であるのだと思つて見たが、姿勢端嚴さという感じがした。

が、  
自分の胸を隠らせたのは、其のお姿よりも、其の周圍に、樹の實のやうに下つてゐる、乳房の形を、圓い、白い布片でくるんだものが、鈴なりになつ



てゐるのに氣付いたからであつた。自分は、先年、寶生へ詣つた時、それと同じ乳房を貰つて、歸つてきて、今に秘藏してゐるのと、同型であつた奇遇に、感じたことである。

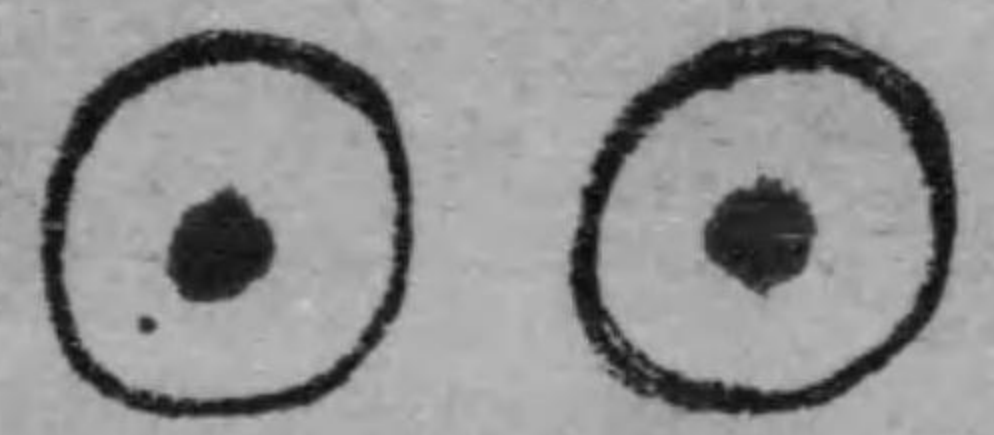
京や大和邊では、乳に就ての祈願は、多くは繪馬に描いたものやうに思つてゐるのが、乳房の恰好な形に、こしらへて、あげてゐるのを見て、自分には、此處で、乳の祈願さ、いふ畫題で、一枚描いて見る氣になつた。法華寺のお





厨子の前でおもひでの書を思ひついた様に、長命寺の観音の御堂で、又一つ書材を得た様な気がした。

此所の御堂で、いろ／＼の空想に耽つた、歩を右手の三重の塔に向けた自分はふと、御堂にあがつてゐた額の題字に氣付いた、それは、慈眼といふ大字であつたのであつた。



石山より瀬田邊を瞰下ろす時の橋に、長命寺の石段から、湖より三上山鏡山邊を見まはすときの感じは、一つである。比良には一點の残雪を残してゐる、三上山は圓ろく、鏡山はひらたく直ぐ眼の下に、小さな島があつて、客を乗せた小舟が、八幡へ歸つて行くのが見える。自分達は、湖畔へ降らうとして、お辨を下げた、遊山の女連さ、すれちがつて石段を下つた。

茶店に戻つて、晝飯を命じた。くしにさした、ギギといふ魚を炙つて、車夫はうまさうに食べてゐる、自分達は、玉子の汁で、かなり黒い飯を、一碗つゝ食べた、其の價は三人で僅に三十錢で済んだ。

俵迄を舟に積んで、湖が穩かださうなので、湖上を入幡へ歸ることにした。

岸を遠ざかるほど霞んだ比良の嶺は高く見える、琵琶湖畔に突き出た、長命寺の山々、竹や松杉の間に櫻の咲いてゐるかなり高い峯の木の間に、三重の塔の九輪の頭を、少し見せて、棧橋や土蔵の石垣に、漣のよせてゐる町の上に立つてゐる。舟は風があるので、船頭の櫓の運びも、抄取らぬ、波は船べりを洗つて、船酔ひの、少し崩しかけた頃に、やつと、狭い川筋に入つた。舟は津田村さういふ水郷に着いたのである。

兩岸の菜種の中に、牛を使ふ若い男女、葱や豆の花盛り、釣する小供、物洗ふ娘、幾筋か十文字に通つてゐる水路の行く手に、例の三上山が圓い頭を出してゐる。川一杯の舟が、白帆を上げて入つてくる、先の筋を横に、若い女の掉





さす舟が通つて行く。水國の春は柔種の匂ひに、川柳の新芽さ、霞んだ山さ、垣根の花さ、板橋さ、乾したる網さ、旅人を乗せた舟さ、湖の風さで、此所はかなり畫趣に富んだ所である。

さめて貰ふ旅籠は無いかさ、百姓に聞いて見ると、若い女達は顔を見合はした。「新右衛門さんの所ところに行つて、宿めて貰いなさらばや」と頗る曖昧な返答である。此の村には宿屋は無いさというのである。其の新右衛門さというものが、唯一つの料理屋さというのださうである。

自分は其の料理屋を尋れた。宿屋の鑑札が無いからさというので、その周旋で、百姓家を見つけて貰つた。夫婦に娘が二人、廣い土間さ、物置の二階さ、座敷が二間である、自分は一夜をこゝに宿めて貰つた。

百姓の一家は、夕暮歸つてきた。かみさんは、いろ／＼親切に世話をしてくれる。が、心づくしの手料理は、どうも口にはあはないので、却て氣の毒な思がする。鮓の味増漬の焼物は、こゝでの御馳走であつた。四角い木の枕をして、燻つた石版摺の御門主のお歌の額の下で、御開山の越後のお旅の事などを思つて寐た。

其の翌朝「ひやごぞんで、ほんわるう御座ぬます。」と、かみさんが盛つて呉れた、一碗の朝飯を食べて、其のかみさんに荷を背負はして、湖畔の村を立つた。自分は、いつも琵琶湖を汽車から見ると、時柔種の咲く頃想像してゐた水國の春を、今度ばかりは、十分に見物した。而して此の津田村さいふ所を、同好の友に紹介したいと思ふのであつた。

日本琵琶圖手紙  
新





目次と世評

目次と世評



賜天寛台寛

日本名勝寫生紀行

本書は時代の要求に應じて出てたる繪畫本位の新名所圖繪なり、其内容外觀ともに秀麗善美を悉して目も爲めに眩せむとす、宜なる哉讀者の讚辭は之を以て藝術界の珍となし出版界革命の偉業となせり。著者は白馬會に錚々たる名ある岡野榮、中澤弘光、山本森之助、小林鍾吉、跡見泰の五氏が隨所に勝地を寫し風俗を描きて畫趣縱横、清楚なるあり、端麗なるあり、筆者の特質自から現はれて感興頗る深く、小林氏の詩的紀行文はその景を語り情を寫して洒脱輕快、よく自然を觀察して餘蘊なし。本文は多數のカットを挿みての二色刷新にして面白く、表裝圖案と見返し圖按の古雅にして粹味ある俱に意匠拔群、一種云ふべからざる異彩を放てり、されば丹青家にありては唯一の好資料、一般家庭にありては純美なる讀物、若くは畫帖として客間の裝飾たるべく、之を羈旅の伴々となさば、舟車に其無聊を慰し兼て好ガイドたるべし。

挿畫 第一卷

- 表裝圖案  
總屏 日光 (彩畫、木版)  
馬返し (彩畫、木版)  
中澤弘光 (水彩畫、三色版)  
屏畫、嶽名 (彩畫、木版)  
伊香保の町 (鉛筆畫、寫真版)  
榛名社頭の茶屋 (鉛筆畫、寫真版)  
靈神の石碑模寫 (毛筆畫、木版)  
屏畫、妙義 (彩畫、木版)  
妙義第二石門 (鉛筆畫、寫真版)  
妙義第四石門より (鉛筆畫、寫真版)  
屏畫、碓氷淺間 (彩畫、木版)  
屏畫、夜の淺温泉 (彩畫、木版)  
屏畫、善光寺 (彩畫、木版)  
朝の善光寺 (色鉛筆畫、木版)  
善光寺廻廊 (鉛筆畫、寫真版)  
姨捨山 (鉛筆畫、寫真版)  
姨捨山月見堂 (鉛筆畫、寫真版)  
屏畫、諏訪 (彩畫、木版)  
諏訪神社頭 (彩畫、木版)  
見返し圖案(繪圖) (彩畫、木版)

- 日光 (水彩畫、三色版)  
伊香保溫泉宿 (鉛筆畫、寫真版)  
機名社頭 (鉛筆畫、寫真版)  
信州中野町 (鉛筆畫、寫真版)  
田中雲景 (鉛筆畫、寫真版)  
善光寺本堂 (鉛筆畫、寫真版)  
信州鹽尻町 (鉛筆畫、寫真版)  
木曾奈良井の宿屋 (鉛筆畫、寫真版)  
木曾はたごや (鉛筆畫、寫真版)  
鳥居崎頂上 (毛筆畫、木版)  
木曾殿原 (鉛筆畫、寫真版)  
木曾舊棧跡 (毛筆畫、木版)  
木曾舊島町 (鉛筆畫、寫真版)  
木曾須原の月 (鉛筆畫、寫真版)  
木曾野尻 (鉛筆畫、寫真版)  
木曾川木流し (鉛筆畫、寫真版)  
木曾路 (鉛筆畫、寫真版)  
見返し圖案(印譜) (彩畫、木版)

山本森之助

- 中澤弘光 (水彩畫、木版)  
華嚴の上流 (彩畫、木版)  
白雲瀑 (鉛筆畫、寫真版)  
戰場が原 (水彩畫、寫真版)  
榛名湖 (鉛筆畫、寫真版)  
妙義山全景 (鉛筆畫、寫真版)  
淺間山 (水彩畫、三色版)  
夜の千曲川 (水彩畫、木版)  
諏訪の湖 (油畫、三色版)  
木曾洗馬村 (鉛筆畫、寫真版)

挿畫 第二卷

- 表裝圖案  
總屏 日光 (水彩畫、三色版)  
美濃信濃の國境 (鉛筆畫、寫真版)  
日光太平の霧 (水彩畫、三色版)  
赤城山の月 (水彩畫、三色版)  
榛名神社 (鉛筆畫、寫真版)  
雪の馬車 (毛筆畫、木版)  
朝の諏訪湖 (彩畫、木版)  
屏畫、木曾路 (色鉛筆畫、木版)  
木曾風俗 (色鉛筆畫、木版)  
木曾路釣越し (鉛筆畫、寫真版)  
木曾川 (鉛筆畫、寫真版)  
跡見 泰 (彩畫、木版)  
雨の妙義町 (鉛筆畫、寫真版)
- 表裝圖案  
總屏 利根川 (彩畫、木版)  
取手 (鉛筆畫、寫真版)  
佐原 (鉛筆畫、寫真版)  
香取神社 (鉛筆畫、寫真版)  
祭文語 (彩畫、木版)  
鯨干し (毛筆畫、木版)  
漁師 (鉛筆畫、寫真版)



屏畫、房總半島 (彩畫、木版)  
 大原石燈籠 (毛筆淡彩、寫真版)  
 小湊漁村 (鉛筆畫、寫真版)  
 清澄旅舎 (毛筆畫、寫真版)  
 那古寺 (鉛筆淡彩、木版)  
 屏畫、箱根舊道 (彩畫、木版)  
 屏畫、口伊豆 (彩畫、木版)  
 反射爐 (鉛筆畫、寫真版)  
 江川太郎左衛門邸 (鉛筆、寫真二色版)  
 天城山登り口 (鉛筆畫、寫真版)  
 屏畫、奥伊豆 (彩畫、木版)  
 土肥大湯 (毛筆淡彩、木版)  
 魚見岬 (鉛筆畫、寫真版)  
 伊豆山 (鉛筆淡彩、木版)

見返し圖案(繪圖)  
 將門城趾 (彩畫、木版)  
 汽船の中 (毛筆淡彩、木版)  
 潮來菖蒲の波 (毛筆淡彩、木版)  
 鹿島社頭 (鉛筆淡彩、木版)  
 鏡子供養塔 (鉛筆淡彩、木版)  
 君ヶ濱 (鉛筆畫、寫真版)  
 犬吠岬松原 (水彩畫、四色版)  
 大若 (鉛筆淡彩、木版)  
 波切不動 (鉛筆淡彩、木版)  
 隧道 (鉛筆畫、寫真版)  
 日蓮上人行の趾 (鉛筆畫、寫真版)  
 鴨川 (鉛筆淡彩、木版)  
 白濱 (鉛筆畫、寫真版)

靈之島沖之島 (毛筆淡彩、木版)  
 關所趾 (鉛筆淡彩、寫真版)  
 箱根舊道 (鉛筆淡彩、木版)  
 獨結之湯 (水彩畫、寫真版)  
 湯ヶ野温泉 (水彩畫、四色版)  
 石廊岬 (彩畫、木版)  
 松崎海岸 (水彩畫、四色版)  
 雲見岬 (鉛筆淡彩、木版)  
 湯河原温泉 (鉛筆畫、寫真版)  
 見返し圖案(避暑地)

山本森之助  
 潮來出島 (鉛筆畫、寫真版)  
 大東海水浴場 (鉛筆畫、寫真版)  
 小松原 (鉛筆畫、寫真版)  
 地曳網 (鉛筆畫、寫真版)  
 海草採 (鉛筆淡彩、木版)  
 白濱の月 (水彩畫、四色版)  
 船形觀音堂 (鉛筆畫、寫真版)  
 勝山海岸 (鉛筆畫、寫真版)  
 長津島 (鉛筆畫、寫真版)  
 堂ヶ島 (水彩畫、四色版)  
 天城山 (鉛筆畫、寫真版)  
 初島遠望 (彩畫、木版)

小林鍾吉  
 船月の波 (鉛筆畫、寫真版)  
 御手洗の池 (彩畫、木版)  
 川口明神 (鉛筆畫、寫真版)  
 小湊誕生寺 (鉛筆畫、寫真版)  
 清澄山登り口 (毛筆淡彩、木版)

星の井 (鉛筆淡彩、木版)  
 朝日の森 (毛筆淡彩、木版)  
 仁右衛門島 (鉛筆淡彩、木版)  
 白濱の耕作 (鉛筆畫、寫真版)  
 鉦切一の宮 (毛筆淡彩、木版)  
 蘆之湖の富士 (水彩畫、木版)  
 古奈神社 (鉛筆畫、寫真版)  
 湯ヶ島 (鉛筆畫、寫真版)  
 下田港 (鉛筆畫、寫真版)  
 加茂温泉 (水彩畫、四色版)  
 小杉原岬 (鉛筆畫、寫真版)  
 松崎波止場 (鉛筆畫、寫真版)  
 田子灣の富士 (水彩畫、四色版)  
 吉奈温泉 (鉛筆畫、寫真版)  
 狩野川 (水彩畫、四色版)  
 月見ヶ丘 (鉛筆畫、寫真版)

跡見 泰  
 大舟津 (色鉛筆畫、木版)

挿畫 第三卷  
 岡野 榮  
 表裝圖案  
 總屏 (彩畫、木版)  
 屏畫、祇園 (彩畫、木版)  
 屏畫、西山 (彩畫、木版)  
 屏畫、比叡山 (彩畫、木版)  
 屏畫、東山 (彩畫、木版)

屏畫、北山 (彩畫、木版)  
 屏畫、伏見鳥羽 (彩畫、木版)  
 屏畫、宇治 (彩畫、木版)

見返し圖案(繪圖)  
 春の宵 (水彩畫、木版)  
 舞妓 (水彩畫、木版)  
 壬生狂言 (彩畫、木版)  
 保津川橋 (鉛筆畫、寫真版)  
 菓子賣 (鉛筆畫、寫真版)  
 御堂スケッチ (鉛筆畫、寫真版)  
 唐崎の松 (毛筆淡彩、木版)  
 三井寺男阪上 (鉛筆畫、寫真版)  
 疏水の中 (毛筆淡彩、木版)  
 西石垣の雨 (水彩畫、四色版)  
 清水寺舞台 (彩畫、木版)  
 鴨川の布晒 (毛筆淡彩、木版)  
 樹屋旅館の一隅 (鉛筆畫、寫真版)  
 稻荷祭 (彩畫、木版)  
 黄檗山山門 (鉛筆淡彩、木版)  
 見返し圖案(夕涼)

山本森之助  
 四條の夜景 (油畫、四色版)  
 保津川 (油畫、四色版)  
 嵐山千鳥ヶ淵 (彩畫、木版)  
 渡月橋 (鉛筆畫、寫真版)  
 仁和寺の塔 (鉛筆淡彩、木版)  
 上加茂入口 (鉛筆畫、寫真版)

上加茂の奥 (彩畫、木版)  
 八瀬村 (鉛筆畫、寫真版)  
 三井寺 (毛筆淡彩、木版)  
 大文字山 (鉛筆畫、寫真版)  
 南禪寺山門 (鉛筆畫、寫真版)  
 大徳寺の一部 (鉛筆畫、寫真版)  
 高尾 (鉛筆畫、寫真版)  
 東寺の塔 (油畫、四色版)  
 伏見三栖社頭 (鉛筆畫、寫真版)  
 宇治橋三之間 (鉛筆淡彩、木版)  
 白雲閣 (毛筆淡彩、木版)  
 宇治の茶店 (毛筆淡彩、木版)

小林鍾吉  
 都踊抹茶席 (彩畫、木版)  
 花窓太夫 (鉛筆淡彩、木版)  
 西本願寺正門 (鉛筆畫、寫真版)  
 高瀬川の雨 (鉛筆淡彩、石版)  
 小倉山時雨の亭 (鉛筆畫、寫真版)  
 仁和寺祖師堂 (鉛筆畫、寫真版)  
 夜の北野天神 (鉛筆畫、石版)  
 下加茂一の鳥居 (彩畫、木版)  
 下加茂御手洗 (毛筆淡彩、木版)  
 八瀬の蒸風呂 (鉛筆淡彩、石版)  
 大原女 (彩畫、木版)  
 八瀬の牛車 (鉛筆畫、寫真版)  
 辨慶屋敷趾 (鉛筆畫、寫真版)  
 耳塚 (鉛筆畫、寫真版)  
 阿彌陀ヶ峯 (鉛筆畫、寫真版)  
 永観堂 (色鉛筆、寫真版)

智恩院の鐘 (鉛筆畫、寫真版)  
 仙洞御所 (油畫、四色版)  
 金閣寺水殿 (鉛筆淡彩、木版)  
 横尾 (鉛筆畫、寫真版)  
 愛宕山 (鉛筆畫、寫真版)  
 伏見稻荷の鳥居 (彩畫、木版)  
 通天橋の青葉 (毛筆淡彩、木版)  
 鳥羽の懸塚 (鉛筆畫、寫真版)  
 伏見 (鉛筆淡彩、木版)  
 淀川の船中 (鉛筆淡彩、木版)  
 宇治十三塔 (鉛筆畫、寫真版)  
 夕の勤行 (毛筆淡彩、木版)  
 加茂の葵祭 (油畫、四色版)

跡見 泰  
 東山遠望 (彩畫、木版)  
 比叡山二内堂 (油畫、四色版)  
 叡山下り口 (鉛筆畫、寫真版)  
 銀閣寺 (鉛筆畫、寫真版)  
 清閑寺御陵 (鉛筆畫、寫真版)  
 六角堂 (鉛筆畫、寫真版)  
 二條城 (鉛筆淡彩、石版)  
 平等院 (彩畫、木版)  
 茶摘女 (鉛筆淡彩、石版)

奈良紀念合作繪葉書 (石版)  
 大阪紀念合作繪葉書 (石版)  
 京都紀念合作繪葉書 (石版)  
 同 (石版)



世評

第一卷

國民新聞「東京だより」 門外漢

畫師の眼中 別天地あり其の觀察の人々の軽々看過する所を模倣して之を特出し之を表明するは彼等に於ては尋常茶飯の業のみ記者は屢々汽車全通前の東海道を往復したり而して廣重の東海道五十三驛の錦繪に對する毎に自から躍然として失せざるを得ざる者ありき。

廣重の筆 や、軟弱未だ北齋の鼎を狂ぐるの雄筆に匹すべくもあらずされど其の平々凡々の田圃や松並木や磯際や峠の一軒茶屋や渡船の船頭や悉く之を美化し之を畫化したるの手に至りては實に吾人をして感嘆已む能はざらしむるものあり其の好んで奇を求めざる所却て彼の本領の存する所以たるに似たり。

光寺、諏訪及び木曾道中を放遊して其の隨處に寫生したるものを集めて一書となし且つ其れに紀行文を添へたる小冊子也。頗る粹味ある小冊子也。 上州、信州の地は日本國中にて最も西洋畫に適するの風景を有す。諸君は其の旅行地に於て先づ其の便宜を占めたりと可申候、而して其の畫何れも各個の特色を且つ其の特色を發揮するに油繪、水彩、鉛筆、色鉛筆、毛筆、ペン畫等を用ひ之を複製するに寫眞版、三色版、木版色刷を雜へ用ひたるは最も喜ぶ可き事に候。 例せば山本氏の「戰場が原」小林氏の「赤城山の月」中澤氏の「鳥居峠」の如き何れも西洋畫法を日本風景に應用して最も其の調和を得たるものたるに庶幾し。 諸氏皆能手たり。特に山本氏の布局大なる風景畫に中澤氏の剝山殘水のスケッチとは相対して其の妙を發揮致候。 吾人は其の複製に就て特筆するの一事を遺る可からず就中木板を最とす。吾人は其の彫刻家たる伊上氏印刷者たる西村氏の成功をも併せて特筆するを遺る可からず。(十月二十五日)

心の花 雨ふりそいぎて寂しき夜、あるは語らふ人もなきつれづれ折なきに繰返し見てあかざる者は、名勝圖繪、旅日記の類なるべし。近頃頃にいたりて、或は旅行案内といひ、或は紀行文集といひ、さる類の書の公にせらる。ものくまなくあれど、その挿める圖畫は多くは寫眞にて趣乏しく、その文はた多くは粗雑にして、雅びかならず、なほ古人の書に如かざる思あらしむ。さるを此度世に出でたるこの日本名勝寫生紀行の編はそれらの書はその選を異にするものありて、日光、伊香保、榛名、妙義、淺、善光寺、諏訪、木曾の名だ、る境を、岡野榮、中澤弘光、山本森之助、小林鍾吉、跡見泰氏等諸畫家が親しく経めぐりてうつしまめたる鉛筆畫、水彩畫はた油畫の數々を、精巧なる印刷によりて刷り出でたる數十葉の繪畫ををさめ、これに添ふるに一編の紀行文を以てしたるものなり、もとよりその道に名だる人々の筆さてその畫の何づれもとりくに趣あることを言ふをまたずかつ其の文また専門家を驚かしむるにたる詩趣に富める文字、世の常かいなでなる文の類にあらず。その文をよくその道すがるの畫をつぎくにひろげゆくに感興いふは

かりなし。殊に遊をのぞきてその他の地は、いづれも評者が爲には再遊もしくは三遊もせしところにて、一つづつにそのかみの記憶の繰返へされて、覺えず卷のなほるを忘れしめぬ。吾人はこれくもかゝる趣味ある書の世にいでしを喜び、旅行家はもとよりいはず、いかなる家庭にも、必ず一つは備へらるべきものなりと思ふ。終にのぞみてかゝる書を出版界にいだしたる書店の勞を多とし、なほ益々著者を輔けて、その完成を全からしめんことを望む。(第百號)

新小説 白馬會々員中其の人ありさ知られたる湯淺一郎、山本森之助、中澤弘光、岡野榮、小林鍾吉、跡見泰の六氏昨年十一月より向一ヶ月近く日光より伊香保、妙義、淺、善光寺に詣て諏訪を過ぎて木曾に入りたる寫生旅行中記事は早稻田文科出身の小林氏擔任して得意の詞句を列れて讀む者また勝道を探るの想ひあらしめ卷頭に同人がおのがじに描きなしたる寫生畫五十餘枚三色版に網版に將た木版に印刷してさりくに趣味深く加ふるに釘装美麗を極めたりこの巻年を追ひ

いよく、他方面の寫生紀行をものして發刊すべしとは丹青界の爲め喜ぶべき現象なり。(十一年第十一號)

日本新聞 青年西洋畫家として錚々の名ある岡野榮、中澤弘光、山本森之助、小林鍾吉、跡見泰の五氏が日光、伊香保、妙義、善光寺、諏訪、木曾等を旅行して其の勝地を畫にし小林鍾吉氏の紀行文を添へたり繪畫は水彩あり油繪あり鉛筆あり一頁毎に人を異にし木版、三色版、寫眞版等何れも原色其儘にて彫刻は伊上凡骨氏の手になりたる者なれば美麗にして精巧なる事云ふばかりなく畫面凡て六十五清楚なるあり、之を一幅の風景畫とするも可之を旅行の榮たる新名所圖繪とするも可居ながらにして勝地の光景を想像せしむること斯の如きはなし猶ほ一卷二巻を刊行して從來の新名所圖繪に准するなり云ふ面白き企と云ふべし裝釘も美麗なり。(十月廿八日)

讀賣新聞 白馬會の數氏の筆に成る「日本名勝寫生紀行」は近來面白き出版物なり小林鍾吉氏の詳細なる文は畫家とし

大阪毎日新聞 岡野榮、中澤弘光、山本森之助、小林鍾吉、跡見泰の五畫伯が日光、伊香保、榛名、妙義、淺、善光寺、諏訪、木曾を紅葉より雪にかけて放浪せし寫生紀行なり挿畫は六十餘個木版あり三色版あり寫眞版あり俱に頗る鮮明、裝釘また善美を盡し紀行文は小林氏の筆になり洒脱誦すべき者多く美術界の珍と云ふべし。(十一月四日)

美術新報 白馬會の洋畫家岡野榮、中澤弘光、山本森之助、小林鍾吉、跡見泰の五氏が昨年野濃の間を跋渉して畫囊を充たしたる旅行の土産として専ら諸氏の畫を以て紀行に代へたる者日光、榛名、妙義、唯水、淺間、淺、善光寺、諏訪、木曾路旅の歌に分ち諸氏の畫に小林氏の文を添えたり全篇凡て自然の氣に満ち雅致あり生氣あり而して之に美術的の趣味を加へる殊に其の印刷に至つては三色版、木版、寫眞版の鮮巧を致し飾るに到らぬ限なき釘装の美を以てす。是れ誠に見て趣味あり讀



で面白くなくては自然及旅行の案内となり又青年者取材の料となる可し。(十月十五日)

東京日々新聞 本書は小林鍾吉、岡野榮、中澤弘光、山本森之助、跡見泰の諸氏が日光、伊香保、榛名、妙義、善光寺、諏訪、木曾等を行脚したる際の寫生畫六十有餘種を鮮明なる寫眞版、石版、木版にて複製して之に小林氏の輕快なる紀行文を添へたるもの一見新しく其の地に遊ぶの思あると共に苟も丹精に志す者には好個の参考書なり。(十月二十三日)

人民新聞 白馬會の俊才岡野榮、中澤弘光、山本森之助、小林鍾吉、跡見泰の五氏が畫筆を掲げて日光、伊香保、榛名、妙義、徂徠、彌目の光景を得て直に之をコンパスに上せたる者、六十五葉を或は木版、三色版寫眞版に映したる畫帖にして添ゆるに小林鍾吉氏の筆なる紀行文を載せたり。畫家として五氏の技倆は世自ら定評ある可し吾人門外漢は今其の繪畫に付て細評を

試みるの權利を有せず、只、寧ろ驚目して之を世に紹介せざるを得ざるは其の裝釘の意匠拔群にして印刷の綺麗殆んど未曾有なるの一事にあり近來、國民の美術に關する趣味向上して文藝に對する好尚動もすれば贅澤に流るゝが如き潮流あるに連れ、文藝書の印刷に多大の意匠と費用とを費やし、反つて之等の高價なる書類が、半ばは裝飾品として賣行よしと一般の唱ふる處にして、最近刊行の物に付て之を見るも往々目を驚かすが如きものなきにあらざる、而も斯かる内容の美麗にして、高價なる書籍が能く其の内容と軒輊なきや否やは大なる疑問にして、少くも從來世に現はれたる者の中名實相叶ひて裝飾以外體裁以外、之を珍重するに値する者絶無なりきと云ふも敢て誣言にあらざるが如し。而して、本書出づるに及んで吾人は始めてこの遺憾を補ふたるの心地す、假へば其味を帯べる、其の見返圖案の古雅にして幾分の俳味を含める先づ巻を執つて讀者を恍惚せしむ若し夫れ挿入の六十餘畫に至つては五氏の特長參差として錯落し、濃淡疎密、親しく觀者を驅つて旅中の客と

ならしめずんば止まず、思ふに斯の如き小形なる洋風畫を集めて氣の利きたる單行させる者恐らく從來に其の例なかる可くして、之を出版せる書肆に取つて或はは大事業なりしなる可し、此の點に於て書肆中西屋も亦斯道に忠實なりと云はざる可けんや、吾人は廣く之を世に勧むる可し畫家と書肆とが更に奮發して、第二卷第三卷を出すの速ならん事を慫慂す。終りに臨んで尙一言を吝むあたはざるは紀行文の筆者小林鍾吉氏の筆力なり、其の日光に宿れる條の一節に「風呂場に通ふ廊下は未だ宵ながら、漏れ来る湯氣に行燈の光淡く、戶外暗ければ足元危ふき湯殿の戸を、人氣ありとも思はず、がらりと開けて躍り入れれば時ならぬ雪一團湯の香高く蒸し上る煙の中に膝の白き背丸、乳柔きが微見え、艶々した頃二十計り、高き窓近く置かれ、燈火の照り返しに、はつきりし面は湯上りの化粧媚めかしう畫に見る人がさ驚かれ

全の良書にして永く傳へて誇る可き斯界の珍と賞すべきか。(十一月八日)

文章世界 岡野榮、中澤弘光、山本森之助、小林鍾吉、跡見泰の五洋畫家が、昨年の丁度今頃、上野、下野、信濃、美濃にわたつて旅行された時、その所々で寫生したるものを或は木版に或は石版に或は三色版に或は寫眞版にして挿入し、これに一編の旅行記を附したるものが本書である。普通の旅行記と異つて繪畫を主としてあるから、これを見るものは、容易く其の地其の境を想像する事が出来る。繪畫の數凡六十餘枚各畫家の特質自から現はれて中々に興趣盡きず。殊に紀行文は、普通の旅行家とは異つた觀察も澤山あつて、叙景を學ぶものゝ爲めには少からざる裨益を與へるであらうと思ふ裝釘の美亦これに伴ふ。(第一卷九號)

大阪朝日新聞 本書は海外畫旅行の途に上りし湯淺一郎を送らんとするに際し去歲十一月二日より十二月十三日に至る四十有餘日を信濃、上野、下野、美濃の各地に

行脚し山川の美を探りて共に談じ共に描き送別の意を現はさんとしたる同行者岡野榮、中澤弘光、山本森之助、跡見泰及紀行擔當者兼畫家小林鍾吉の五氏へ長野にて小笠原貞子嬢を加へし大仕掛の留送別紀念にして製本中々ハイカラに出来上り然も其の大半はスケッチ畫を以て充たされ後半五人合著の日光以來小牧街道にのたつたの旅行記迄面白く書かれたり尙本書は何れ後巻に連続すべく第一卷として刊行せられたれば、全部出揃の上は定めしすばらしきものならむも先づ此巻のみにても旅行記兼畫帖として趣味頗る深し。(十一月十一日)

中學世界 山本、小林、岡野、中澤、跡見五氏の合著とす。木版、石版、三色版、寫眞版等あらゆる製版術を利用して都合數十葉の製作を公にし且つ巻末に添ゆるに小林氏の寫生紀行數篇を以てす、用紙の佳良なると裝釘の異美なること云はずもあれその一部の書冊を通じて、藝術に對する深厚なる精進と憧憬の情の溢れたるは何より嬉し、又吾人が此書に於て著者自身の特技が如何にも躍如たるを見て喜

ぶものなり假令へば中澤氏の幽麗。岡野氏の飄逸。小林氏の豪宕等際然として數ふべき趨勢が終に一躍して這般の美術的書冊を産むに至らしめしは驚くべき現象なりと云へ而も能く此難事にあたりて、その素志を貫徹したりし中西屋主人の功勞は未だ俄に没すべからざるものあり、吾人は此の書を以て近時出版界を飾る二月の花に譬へんと欲す。(第十四號)

世言 第二卷

時事新報 著者等五畫家の、利根川沿岸より銚子に出で、房總半島を一周したる旅行、および箱根舊道を越え、伊豆海岸を西より東に一回したる旅行の間を得たる寫生圖を集めたるものにして、紀行文は小林鍾吉氏の手になる。この紀行文中にも多數のカットを挿入して、其境地人の風物を活躍せしめたり。見返しに、其經過したる地圖を示したるも、善き思付にして其他表紙の意匠、利根川、銚子、房總半島、箱根舊道、口伊豆、奥伊豆と其紀行を分割する部分々



々に挟みたる扉畫、何れも充分に著者等の雅味を發揮せり。

本書の第一巻(定價二圓五十錢)は、日光、榛名、妙義、碓氷、淺間、遠、善光寺諏訪、木曾等の勝區寫生五十餘圖(紀行文百七十三頁)を収めたるものにして、一昨年九月其第一版を發行し、好評を博し、天覽の榮を得て、直ちに再版を出したり。本書また同じ成功を見んことを斷じて疑ふべからず。油畫あり、水彩畫あり、鉛筆畫、色鉛筆畫あり、その圖に從ひ、或は之を木版に起し、原色版に付し、また寫眞版に付せり。一たび之を緋かば、身一大畫堂にあるの思あると共に、また居ながらにして山河を跋渉するの情るべく、俗腸を一洗し、苦熱を忘るゝに堪へたる、實に現代の好著なり。追次巻を重ねて、日本全國を完せんことを囑望に堪へず。小林氏の紀行文今少し洒脱ならんことを欲すれど、既に本誌に、氏の「畫行脚」に關して云ひたることあるが如く、畫家にして此の文ある近頃にあつて珍すべし。たゞし評者は、その圓熟せざる、ホカビエラリに乏しき、本書の國文クらしク調よりも「畫行脚」の言文一致體を氏に取らんことを欲す。日本の新名勝記として、本書の完璧を期する上よ

り觀すれば、向後、然るべき文士を一行の中に加へ、紀行文を之に待つ方あるひは可なるやも知るべからず。されば「檜橋の林、深碧の海、エズキオの山、環珩の洞、南國の空に光彩ありて、夜清々舟の音楽隊が、海波に浮ぶ、美ばしさよ、温泉の國と聞えたる、南伊太利の風光は我等が明暮に戀ふる所、されど近くは我が伊豆半島、柑子の林黄に熟して、水の縁を走る舟路の旅、至る所に温泉湧きて、七十有餘の温泉場、至手石の彌陀窟、堂ヶ島の奇勝、恰も伊太利の其に似たるは我等の旅思を誘ふもの多かりき」と云へる、口伊豆、奥伊豆、箱根の叙事には侮るべからざる筆致あり、別けて堂ヶ島の奇勝を叙する邊、讀むもの行を共にして、親しく其境にあるの思あり。一體に旅程を詳に示したるは、遊子に便を興ふること大なり。(文藝週報九月廿一日)

日本新聞 第一巻が既に非常の驚歎を以て迎へられし日本名勝寫生紀行文は今回更に其第二巻を出し世人をして一層驚歎せしめたり一言之を評すれば本書は書籍に關する一切の技術の日本に於け

くは算盤にも當らざるべき此の如き贅澤なる出版に任じ技術の進歩に貢獻せるは亦特筆せざる可からず。(七月三十日)

讀賣新聞 「日本名勝寫生紀行」第二巻は白馬會の新進畫家岡野榮、中澤弘光、山本森之助、小林鍾吉、跡見泰の五氏が昨年六月利根川、沿岸から銚子に出で房總半島を一周した時の寫生畫と十一月箱根舊道を越えて伊豆半島を旅行した時の寫生畫と之れに附するに小林鍾吉氏の寫生紀行文を以てしたものである。繪畫の數全て七十二枚、流石に新進氣鋭の人々の筆たるだけあつて居ながらにして其の境に遊ぶの思ひあらしむ。只木版にしては不適當と思はる、様々畫までも木版にしたのは聊か遺憾である。小林鍾吉氏の紀行文は餘りに文章に凝りすぎて鏡花式になつた點自然の見方、地方的特調の出で居ない點などに嫌らぬ節はあるが、然し此紀行文を以てして優に専門家の墨を摩する事は出来る、而して亦一方畫の説明し得ざる處を補つてゐる。紀行文中に挿んである木版畫なども清楚で面白い。清風徐るに吹き來る處に、此書を緋かば自ら

清涼を感ずるであらう。銷夏の好讀物である。(八月三日)

東京二六新聞 近來旅行といふこと一種の流行となりてこれに關する刊行物ナカク多し、しかも單純なる案内記若しくは御自慢の紀行文に過ぎずして一も後世に傳ふるに足るべきものあるなし本書は白馬會の俊才岡野榮、中澤弘光、山本森之助、小林鍾吉、跡見泰の五氏が嘗て經めぐれる利根川沿岸、銚子、房總半島、箱根舊道、口伊豆、奥伊豆の寫生畫を精巧なる寫眞版三色版、木版色刷に複寫し、添ふるに小林氏の詩趣に富める紀行文を以てせり畫面凡そ八十葉、瀟灑なるあり、豪宕なるあり、洒脱なるあり、幽玄なるあり、全篇總て自然の氣に満ち、これを畫帖と見るべく又明治の名勝圖繪とも見るべく一見その地に遊ぶの想あらしむ紀行文一般の旅行家は其觀察を異にし叙景を學ぶ者の好指針たるべし、裝幀はまた高雅優美にして内容と共に明治の出版物として後世に傳ふるに足る、吾人はかゝる趣味多き書が諸家の應接室さては書齋に飾られんことを望む。(九月廿八日)

る最高度の進歩を示せるものと謂へ、木版に寫眞版に三色版に其等印刷に將た用紙の選擇に製本に總て出來得る限りのベストを盡くしたるを見る内容は言ふまでも無く各名勝の寫生畫と紀行文とを併せ載せしものにして第一巻は上州、野州及び信州の各名勝を紹介し本巻は房總半島の各名勝即ち利根川、銚子、房總、半島、箱根舊道、口伊豆、奥伊豆を紹介せり著者は共に黒田畫伯の高弟たる岡野、中澤、山本、小林、跡見五氏にして寫生畫の巧妙は論なく畫家の手に成る紀行文は更に珍すべし而して寫眞版三色版が歐米のそれに比して殆ど遜色なきは我國技術の進歩今更ながら意想外なるものあり木版に至りては固より我邦の特長なるも伊上氏の彫刻と西村氏の印刷と相待つて特に神品の域に入れりと言ふも溢美に非ず表紙は羅紗紙を用ゐる金箔を以て遠山を白箔を以て海岸線を現はし金箔、墨、朱を以て漁夫の地曳網を現はし一端に紙を貼りて茲に書名を刷り紀行文の部は毎頁盡く二度刷にして寫生紀行文の四字朱印にて捺せし等贅澤なる凝り方は定價の一冊三圓五十錢も寧ろ廉すべく而も其「凝り方」が骨董的凝り方に陥らずしてハイカラ的凝り方なる更に嬉し書肆中西屋が恐ら

大阪時事新報 本書は東部の若手の畫家何れも腕利の岡野榮、中澤弘光、山本森之助、小林鍾吉、跡見泰等五氏の合著にして本巻には利根川、銚子、房總半島、箱根舊道、口伊豆、奥伊豆の風光水色を以上の五氏が思ひ／＼揮灑せるスケッチを着色版にて夥しく挿入し、紀行文は小林鍾吉氏が經快なる筆になる、裝幀はい挿畫といひ中々凝つたものといふべく、只見てさへも何んこなく好ましい、洒落たる四六版、全縁の二百十餘頁岡野榮氏が表紙畫も中々に面白し。(九月廿九日)

東京毎日新聞 曩に第一巻を發行して好評を博したる本第二巻には利根川、銚子、房總半島、箱根舊道、口伊豆、奥伊豆各地の名勝風俗の寫眞畫及び紀行文を掲げた。畫は岡野榮、中澤弘光、山本森之助、跡見泰、小林鍾吉等五氏の筆に成りて皆さり／＼に面白く、小林氏の紀行文亦優に専門の文士を凌げるは敬服の外なし、要するに畫と文と相待つて觀者をして座ながらに各地名勝風俗を睹るの思ひあらしむるは蓋し



獲めからざるの作なるべし。(七月廿五日)

中央公論

山本、岡野、跡見、中澤、小林氏等の手に成れるこの第二巻は、利根川附近より房總半島を繞り、更に函嶺より伊豆半島に及びたる晴好雨奇の景致の幾多を載せて出でたり。鉛筆、水彩、油畫の淡掃せるもの濃沫せるもの寫眞版となり、木版錯してあらはれ来るを以て觀者の頁を繰るささもに山隈水涯を經長亭短驛を過ぎて半日放浪の客となることを得べし。ここに、小林氏の文流麗にして巧緻、よくその景を寫し状を描きてしかも氣品あり精彩あり、觀者をして畫中の人たらずんば止まざらしめんす近來の好著として歡迎するもの、評者一人のみにあらずるべし。定價三圓五十錢不廉なるが如くにしてしかも廉なり。(九月號)

明星

寄贈を受けたる新刊書中、中澤、小林、山本、岡野、跡見諸氏の合著、日本名勝寫生紀行、第二巻は房總及び伊豆の諸國を題目とし挿畫七十餘種何れも諸氏の長

技發揮し伊上凡骨氏の木版、西村熊吉氏の印刷と併せて第一巻に比し進境著しく小林氏の紀行文又修飾なき筆致を喜ぶべく、此夏旅行辭を仰へて閉居する小生の如きは、殊に臥遊の樂を知らず出版元は損亡するを常とするに拘らず、中西屋書店の異常なる勇氣を以て出版に當り候ことを敬服致し候。(九十八號)

心の花

岡野、中澤、山本、小林、跡見、五人の畫伯が、利根沿岸より銚子に出で、房總半島をめぐり、更に箱根を越えて伊豆に遊びし挿畫の稿に、小林氏の紀行文を添へたるもの、まづ表紙の筆づかひ疎にしてしかも趣深く、見返しの圖案も古き道中記のおぼえてなつかしく、扉畫六葉各その地方の特色あらはれたり。挿入せられたる彩畫鉛筆、水彩、油畫等印刷何れも精巧を極めてせげき一葉の中に豊かなる精巧地こもり、繰返し見ればもあかす。殊に評者は刀根川には社友數氏ありて、菜花の香取、月の潮來をも屬々訪ひぬ。銚子は、大若の巖上に立ちしこ幾回。安房は弟が病を養ひて數年ありし地、船を浮べて鏡の浦なるはらからの島に遊びし事もあ

りき。某君と共に滄澄の精舎に八月十四夜の月を仰ぎ、勝浦より大原への馬車の動搖はげしきになやみし事もありき箱根の道は十一歳の春、亡き父と共に京に上るまで越えぬ。又一こせ某の君のしるべにて塔が島の離宮を拜觀しつ。天然人工の美をそなへたる樓上左隅の一室より眺めし湖上の夕陽し篝火の色なき、今直目に見ゆるやうなり伊豆はた思ひ出深き地。一葉一葉縋き行くまゝに、そのかみの面影、畫面に浮びいでて、感興いと、深し。わが如く曾遊の人にはもさより、また其境を踏まざる人には又新しき興多かるべし。小林氏の文章よく風俗傳説を寫し中にも鹿島の雨は神々しく天城山頂の廻が昔がたりは小説の如く、松崎の浦なるうらわがき肖像畫家は身にしむやうにおほへ、めしひたる少女は後の即興詩人なるミュッソスの叢に身を埋めしあはれなる賢女も思ひ出らる、かつて故福羽先生の應接室に曉齋漫畫一帙をおきて、これを見つ、待ちよとの意の歌、帙にしるしありしを記憶す。この趣味に富める名勝寫生紀行の、諸家の應接室、さては書齋を飾り

て、第三巻、第四巻つきく發刊せられんことを。(九月號)

趣味

岡野榮、中澤弘光、山本森之助、小林鍾吉、跡見泰の五氏が利根川、銚子より房總半島を一周し又伊豆半島を一周したる寫生紀行である。小林氏の手になつた紀行文もよく出来てゐるが挿畫が實に奇麗で澤山ある木版、コロタイプ、寫眞版、二、三、四色版色々の印刷法を用ひて皆よく出来てゐる見たり讀んだりして面白いのみならず書架を飾るにも適して居る。(八月號)

中學世界

一昨冬第一巻を出して出版界の眼目を惹きたるもの。今回漸くにして第二巻を産みたり如何に此書が畫家、筆者、製版者、彫刻者の努力、丹精を要したるかはこれにても略ぼ察すべきなり。本巻は房總半島、箱根舊道、口伊豆、奥伊豆、利根川、銚子を中心として其附近の風景勝地、これを精巧善美の木版、石版、原色版、寫眞版等あらゆる技術に應用して通計七十餘葉を収む。更にこれに附隨せる紀行は趣味多き詩的文章にして畫と文と

兩々相對し相照して眞に藝界の珍たるに反かす。表紙其他の意匠裝釘に至つてもそれ／＼高尚の趣きを有し一點の浮華の跡を止むるなし。著者は白馬會の花形、中澤、山本、小林、岡野、跡見の五家。(九月號)

文章世界

岡野榮、中澤弘光、山本森之助、小林鍾吉、跡見泰の五畫家が相伴ふて利根川沿岸より銚子に出で房總半島を一周したる明治四十年六月の旅行記と箱根舊道を越して伊豆半島を横斷し西海岸を繞りて東海岸に出でし同年十一月の旅行記とである繪畫八十餘枚は前記五氏の手に成つたもので添へられた紀行が小林鍾吉氏一己の手になつた者なる事は第一巻の時と變りはないが繪畫の木版がいよ／＼精巧に赴いた事と四色版の色彩がいかに落ち着いて居て説き難き匂ひを立してゐるのとは特加せねばならぬ喜びある紀行文には小林氏一流の特色があつて挿畫と相助けてよく其意を味はせ得る裝釘の凝つてゐて而かも瀟洒なのは道に日本趣味であると思ふ。(九月號)

新聲

日本名勝寫生紀行第二巻に就て

新たな繪畫の勃興したる今日必ず新たな名所圖繪なかるべからず中澤、岡野、小林、山本、跡見諸氏の手に成れる本書は乃ちこの要に應ずべく出で來たりしもの、如し第一巻は見るを逸し今日に於て第二巻を得その興趣の洋溢し詩味の空湧するを目睹したりその巻收むるころは利根川沿岸より銚子を経たる房總の半島を首とし箱根より口伊豆、奥伊豆と傳ひたる伊豆半島を次とせり第一部には船戸の渡り取手の宿、香取、鹿島、清澄山、小湊、白濱等あり、第二部には箱根關趾、湯が島、下田港、天城山、伊豆等ありて朝暉夕陰萬千の氣象或は寫眞版となり或は木版となり石版となり四色版ともなりて歴々眼底に映じ來る故に展觀の間評者は小林氏の鮮麗なる紀行文の導きによつて著者とも、に双鞋單杖我は大英雄の跡を吊ひ古廟の樹影を履み山氣の氳氣を吸ひ大海の鞞鞞を聞きて兩半島の美しき自然古き歴史に接するを得べし舊來の名所圖繪のたゞ誇張したる繪畫不自然なる縮圖に強ひて景観を浮べしめ興味を誘起せしむるに比して幾倍の進歩なるかを知らべからず。吾人もさより畫を解せざるもの故に巻中あるところ數十葉の挿畫に對し



て一も品端の語を挿むべからずといへども  
たし髣髴を認むるころのものに就きてい  
は、山本氏はすべてに於いて穩健着  
實なるが如し才氣に於いて缺くるも眞面  
目は一に見ゆるに似たり白濱の月夜の  
如きはこれを代表してあまりありといふべ  
し中澤氏の卓勵風發豪宕の趣筆端  
に溢れて才氣紙上に迸るの風あり將門  
城址の如きはこれなるべし岡野氏は兩者  
の間に出で時には優雅典麗時には逸氣  
奔騰手に應じて自在なるが如し處々の屏  
畫、上表紙と其他の幾多は何れもその兩面  
をあらはせりといふべし小林氏の差綴  
剪裁いづれも人目を牽く強いていは、自  
然に忠實ならんとして興趣に遠ざかりたる  
感あり御手洗の池芦の湖の如きはこれを代  
表すべし而かもいはゆる名所繪圖の興味は  
たゞ此の人によつて得らるゝを見るなり此  
の書主とするところもより繪畫にあり故  
に文につきて云々するは或は失當なるべし  
さいへども小林氏の文流麗典雅一種の精巧  
を含みて温潤玉の如し畫家にしてその筆あ  
るは驚嘆に値ひすべしされどたゞ事を記す  
る精細ならむとして委曲の致は得れども興  
味に於て缺けたるが如く且つ繪畫に對して  
單獨的行動を取りたるに似たりむしる解説

的にして繪畫の附庸たること猶舊名所圖繪  
の文の如くなるを欲するものなり敢て著者  
の二顧を乞ふ。(十九卷五號) 柴生

世評 第三卷

時事新報 日本には日本の色がある純西  
洋畫は純日本の風色を寫すに適しては居な  
い去る三十八年十一月頃より岡野榮、中澤  
弘光、山本森之助、跡見泰及小林鍾吉の五  
氏諸國を行脚して寫し得た油繪水彩毛筆ハ  
鉛筆畫を集め妙を盡し精を極めて日本獨  
技の木版を彫り或は三色版石版網版等にも  
印刷して小林鍾吉氏の雅にして粹なる紀行  
文を添へて以て本書をなす。

さきに其の一卷を發行するや譯者の認む  
る所となり天覽を賜ひ忽ち三版を重ね二卷  
も今や二版を重ね第三卷京都の巻は近々記  
者の机上に届いた就て見るに或は都踊りに  
或は友禪染の舞子に或は茶の湯に紅燈ゆか  
しき島原に夏の四條の川涼みに壬生の狂言  
に高瀬の曳船に嵐山に仁和寺にさては壯嚴  
の加茂の社に古の幻多き葵祭に花こうてた  
もれいな鄒少女に讀經の鐘なる比叡の木  
立に三井寺に鴨川の布晒しに勝一名高き字

治の茶摘みに行うさして皆畫囊中のものな  
らざるはなかつたかくて其描がれたものを  
見るに諸子は艶にして文を描くに適する洋  
畫の長に加ふるに雅にして滋味ある日本畫  
の長を採つて成るべく調和を缺かざらむと  
力めて居る其苦心思ふべしただ殊に目立つの  
は諸子が參酌して居る日本畫は徳川時代中  
にも取り分けて廣重の才筆を酌んで而も美  
事に成功して居る。

山本氏の嵐山千鳥ヶ淵は悠々の水に雅な  
色が出て居る小林氏の下加茂は御手洗ひの  
水に京の舞子の友禪を配したがいかいなれ  
ど筆かろく同氏の大原女は日本畫の色彩跡  
見泰氏の比叡山内堂は技神に入つて身は山  
中の壯嚴なる杉林中にぞめる想がある同氏  
比叡山下には亭々たる杉の間より悠々たる  
湖水を見るサロン中の名畫の面影中澤氏の  
雄筆に似すおくの院より舞臺を見るは細畫  
に屬して廣重の壘をまじ同氏鴨川の布晒し  
は模倣式にて頗る珍々小林氏の仙洞御所山本  
氏の高瀬のもみじ中澤氏の樹屋旅館の一隅  
小林氏の伏見稻荷同じく通天橋伏見よく淀  
川は徳川時代の浮世圖繪を學びて美を極む  
加茂の葵祭は佳作その他岡野氏の表裝圖案  
中澤氏の見返し圖案岡野氏の屏畫中澤氏  
の見返し圖案皆善美を凝して得も云はれぬ冊

# 欠



# 欠

大正元年九月五日印刷  
大正元年九月十日發行

▼日本名勝寫生紀行▲  
第五卷  
東海道卷  
定價金參圓五拾錢

著者權所有



著者 岡野榮  
作 中澤弘光  
者 山本森之助  
小 小林鍾吉  
跡 見 泰

發行者 東京市神田區表神保町二番地 山田九郎  
印刷者 東京市京橋區木挽町二丁目十三番地 村上文重  
印刷所 東京市京橋區木挽町二丁目十三番地 中屋商店印刷部

發行所

東京市神田區表神保町二番地  
電話本局四一〇及二〇一九  
振替貯金口座東京二八一六番

中西屋書店

4



木版影刻  
木版印刷  
寫真及三色版  
活版及石版印刷  
裝釘

伊上凡骨  
大山三太郎  
田中猪太郎  
中屋商店印刷部  
片山吉次郎



30  
467



終